

特別講演

定期健康診査＝關スル諸問題

田澤 鏡 二

(第18回日本結核病學會總會特別講演)

目 次

- | | |
|------------------|--------------------------|
| (1)健康診断ノ實行ニ關スル問題 | (3)定期健康診査ト豫防的治療(又ハ治療的豫防) |
| (A)受診者ニ就テ | (A)目的ト診査時期 |
| (B)症候及ビ診査方法ニ就テ | (B)豫防的治療又ハ治療的豫防 |
| (2)診断結果ノ處理ニ關スル問題 | (イ)肺結核ノ一般療法諸項目ノ内ヨリ |
| (A)病竈ノ發見率ニ就テ | (ロ)人間ノ植物性神経系機能ニ就テ |
| (B)病狀經過ニ就テ | (ハ)人結核症ノ豫防的治療ニ就テ |
| (C)處理方法ニ就テ | (C)唱道ノ由來、實施ノ經過及現在ノ實行問題 |

緒 言

大體ノ内容ハ古クカラ個々ニ發表シテ來タ事ヲ綜括シテ一通リノ筋道ヲ述べ、御斧正ヲ請ヒタイ趣旨アリマシテ、範圍ガ廣汎ニナリマシタカラ、他ノ方ノ文獻ハ多クハ別ノ機會ニ譲リマシタコトヲ御了承ヲ願ヒマス。

健康診断ヲ基礎トシテ結核豫防ヲ遂行シヤウトスルト、問題ニナルモノハ診断ノ方法ト、ソレヲ實際ニ有效ニ普及サセルコトト、診断結果ノ處理ニ關スル事項トノ三者デアアル、其第一ノ問題ハ近年著シク進歩シタガ、第二、第三ノ問題ニ就テハ、此際格段ノ努力ヲ要スルモノガアル、殊ニ第三ノ處理問題ニ就テハ兎ニ角何トカー應ノ準備ガ出來テ居ルトイフノデナクテハ、折角

健康診断ヲ行ツテモ全く無意味ニナツタリ、或ハ却テヤラナカツタ方ガヨカツタカトモ思ハレルヤウナ結果ニナツテ、後ニハ再ビヤレナクナルトイフヤウナ事サヘモ起リ得ルノデアアル、健康診断ハ好イ事デハアルガ、ソレノ缺點ハ人間ノ弱點トシテ怠リ易ク、非常ニ行ハレニクイ事デアアル點ヲ常ニ眼中ニオイテ考ヘネバナラナイ、ソレデ今日ハ此ノ方面ニ就テ多く述ベテ見タイ。

(1)健康診断ノ實行ニ關スル問題

(A)受診者ニ就テ

之レヲ個人的健康診査(個人健診)ト集團檢(又ハ健)診トニ分ケテ考ヘル、治療豫防ノ指導ガ

信念ヲ以テ行ハレ得ルタメニハ、個人的診査ガ必要デアアル、自ラ健康ト思ツテ居ル各個人ガ自

發的ニ診査ヲ求メテ來ルヤウニトイフコトハ容易ニ行ハレルモノデハナイカラ、健康診査普及ノ開拓方法トシ、個人診査ノ豫備方法トシテハ集團檢診ハ最モ效果的デアル。

語釋 用語ハナルベク統一シタ方ガヨイト考ヘ集團檢診トイフ語ヲ用ヒタガ、ソレニ就テハ一言説明シテ置キタイ點ガアル。

(A) Reihenuntersuchung 集團檢診又ハ集團健診ニ就テ

私ハ昭和 3、4 年頃ニ初メテ健康診査普及ノ必要ヲ唱道シタ當時、米國ノ延命協會 Life Extension Institute ノ例ニ倣ヒテ、誕生日健康診査(個人診査)、家族的健康診査ナド稱シ、ソレト並稱スル爲メ團體的健康診査トイフ語ヲ用ヒタ、此ノ語ハ健康診査ノ普及ヲ促ス方法トシテ唱ヘタモノデアツタ、漠然ト了解セシムルヨリハ受診觀念ヲ起サシムル爲メニ有效ト考ヘタカラデアツタ。

其後外國デモ諸氏ノ報告ニ於テ受診者ヲ色々ニ分ケテ居ルノヲ見タガ、其内デハ Braeuning 氏ノ後ノ分類(初メノ分類ハモット細別シテアツタ)ト云ハレル分ケ方即チ(1)開放性結核患者ノ周圍ノ人間、(2)庶民ノ集團、(3)個人ト此 3 者ニ分ケルガ最モ簡明デ丁度前記ノ自分ノ分ケ方トモ一致シテヨイト考ヘテ居タ、之レハ Keyser-Petersen 氏ノ Über Reihenuntersuchungen mit Röntgenstrahlen (Ergebnisse der gesamten Tuberkuloseforschung, Band VIII, 1937) ニ於テ諸氏ノ説ヲ見テ漫然トサウ考ヘテ居タノデアツタガ、暫ク Keyser-Petersen 氏ノ論文ヲ參考トシテヤツテ居ル内一、結局上記ノヤウニ個人診査ト集團檢診ト二ツニ分ケルノガ最モ合理的デアリ實用的デアルト考ヘルニ至ツタ。

Keyser-Petersen 氏モ受診者タル集團ノ種類ニ從ツテノ分類ヲシテハ居ルガ、ソレハ集團檢診ヲ應用スル上ニ於テノ分類ニ過ギナク、且又之レヲ我邦デ實施シヤウトスルト、ソレトハ多少別ニ考ヘタイ點ガ起ツテ來ル、此ノ Reihenuntersuchung ハ由來 Gruppen- oder Serienuntersuchung トイフ語ト同ジ意味ニ何時ノ頃カラカ使ハレタモノデアルガ、同氏ノ考ヘデハ之

レハ本來ハ技術上ノ事柄デアル、ソレデ同氏ハ例ヘバ「レントゲン」集團透視 Röntgenreihendurchleuchtung 又ハ略痰ノ集團の檢診 reihenmässige Auswurfuntersuchung 等ノ如クニ使ツテ居ル、之レハ Serie トイフ語ガ同種類ノ物ノ Reihe oder Gruppe(此ノ 2 語竝ニハ同意義ニ用ヒラル)ヲ意味スルコトカラ考ヘ得ル如ク、其診査ダケチ各人一次々ト行ツテユク意味ト見テヨカラウ。ソレデ吾々ノ考ヘハドウカトイフト實際ニ集團ニ對シテ健康診査ヲ行フ時ノ實施方法ガソノヤウニナルトイフ事實ト、自分が最初カラ從來一般ノ健康診査トイフ語ヲ用ヒズニ、特ニ新シキ健康診査トイフ語ヲ用ヒテ來タ理由ガ個々ノ診査技術ヲ目當テニシテ來タモノデアル觀念トノ二ツノ點カラ、同氏ノ意見ニ次第ニ共鳴シテ來タ、斯クシテ技術的ニ見ルトイフ觀念ニ立ツテ見ルト前ニ述ベタ如キ私ノ所謂家族的健康診査、又ハ Braeuning 氏ノ周圍檢診等ノ語ハ受診者タル人間ノ種類カラ云ツタ語故、混亂ヲ避ケル爲メ之レヲ省略スルコトトシテ、純粹ニ技術上カラ個人診査ト集團檢診トニ分ケルコトニシタノデアル、此二ツハ診査技術ノ上デ云フト明カニ違ツテ居ル、個人診査デハ其個人ノ訴ヘニ依リ、既往症ニ依リ又ハ現在ノ主要所見ニ依ツテ、其個人ニ對シテ必要ト思ハレル凡ユル診査方法ヲ考ヘ、同時ニ不用ト思ハレル診査ハ省略スルノデアルガ、集團檢診ニ於テハ其集團ノ人々ニ對シ一齊ニ、例ヘバ「レントゲン」診査ダケヲ行ヒ、其他ノ診査技術ハ略スルトカ云フヤウナ風ニ行フ事モアルカラデアル、故ニ集團檢診トハ單ニ個人診査ノ集マリトイフ意味デハナイ、ソレデ個人的ノ診査方法ハ個人的健康診査或ハ個人健診ト云ヒテ集團檢診ト區別シタイト考ヘルノデアル、受診者ガ 1 人デナクトモ少數デアルトキハ、個人的診査ノ集リトシテ診査スルコトモ出來、又ハ集團檢診的ニ診ルコトモ出來ル、之ハ時間ト受診者ノ希望トニ依ルコトガ多イ。此ノ分ケ方ヲ受診者ノ種類ニ從ツテノ分類ト混同セシメヌ爲メ一ハ、一例ヲ舉ゲレバ、職工ノ集團檢診ト云フ如キ語ハ不明瞭デ、職工ニ於ケル赤沈ノ集團檢診ト

カ、「レントゲン」線ニ依ル學生ノ集團檢診トカ云フ如キ風ニ稱スベキモノト考ヘル。

(B) 診斷ト診査又ハ檢診ト診察

余等ガ舊來一般ノ健康診斷ト云フ語ヲ用ヒズニ健康診査ト稱シテ來タノハ、上述ノ如ク診査技術ヲ目當トシテノ事デアツタガ、ソレハ例ヘバ赤血球沈降速度ガ多イガ他ニ何モ確實ナ所見ノ無イト云フヤウナ人ニハ、毎月一回赤沈検査ニ來院セシメルトカ云フ如キ場合モアルカラデアル、其最初ハト云ヘバ吾々ハ初メ微熱ヲ問題ニシタノデ、檢温ダケヲ繼續ニヤラセタトイフ如キコトカラ始マツタノデアツタ。

「レントゲン」集團檢診ナド稱スルモ適切ト思ハレルガ、個人診査ノ場合ニハ「レントゲン」檢診ト云フヨリハ「レントゲン」診査ト言フ方が使ヒ慣レタタメカ云ヒ好ク感ズル、併シ夫等ノ點ハ何レデモヨイトシテ、唯從來健康診斷普及ノ唱道ニ没頭シテ來タ者ノ頭ニハ、診査ニシテモ檢診ニシテモ共ニ其上ニ健康ノ 2 字ヲ加ヘテ「自ラ健康ト思ツテ居ル中ニ診査ヲ受ケヨ」トイフ注意喚起ニ努メタイ、然レバ略語トシテハ集團健診トナル譯デアル、集團ノ場合ニモ個人ノ場合ニモ、健診ノ語ハ吾々トシテハ日常使ヒ慣レテ居ル所デアルガ、平素別ニ耳障リニモ感ジテ居ナイ、姑ク記シテ後日ノ參考トスル。

診査又ハ檢診ノ外ニ尙舊來一般ノ診察トイフ語モ茲ニ考ヘラレルガ、個々ノ検査ダケノ場合ナドニハ感ジガ合致セメデアラウ。

講演ノ目的 健康診斷ノ領域ハ廣汎デ必ズシモ結核病トノミハ限ラズ、診査ノ方法モ亦其ノ目的ニ應ジテ變更シテ行カネバナラナイコトハ勿論デアルガ、次ニ述ベル所ハ主トシテ結核豫防ノ目的ヲ中心トシタモノデアル、結核豫防ノ集團檢診ニハ患者ヲ摘發シ、以テソノ周圍ヘノ傳染ヲ防止スルトイフ疫學ノ大目的モアルガ、茲ニハ其ノ方面デナク患者、虛弱者ノ發見ニ次イデハ發見サレタ患者、虛弱者本人ノ爲メノ問題トイフ側カラ一般醫師ノ實行問題ヲ目的トシテ述ベル。

體力國家管理モ將ニ行ハレントスル今日、實際有效ニ健康診斷ノ普及ヲ圖ランニハ、受診者ノ協力心ヲ高メルコトガ最大ノ要訣デアル、故ニ受診者ニ對シテ努メテ強制的施行ノ不快感ヲ與ヘザルヤウ診査技術及ビ診斷結果ノ處理方法等ニ就キ豫メ注意深キ研究ヲ遂ゲネバナラナイ、コノ間ニハ單ニ純科學ト通常考ヘラレル所ノ見知ノミデ強行シ得ザル場合モアル事ヲ知ラネバナラナイ、詰リ醫學ノ範圍ヲソコ迄押シヒロメテ考ヘネバナラナイ、吾々ノ過去十餘年間ノ成績ニ於テモ健康診査ニ依ツテ實際ノ成績ヲ擧ゲテ來タ多數ノ勝利者ハ、結局引續キ個人診査ニ依ツテ繼續シテ來タ人々デアルコトヲ考ヘルト、受診者ノ興味ト理解トヲ喚起シ、協力心ヲ高メシムルコトハ純科學ノ方面ノ研究ニ劣ラザル有用ナ考慮デアル。

(B) 症候及ビ診査方法ニ就テ

個人的健康診査ノ場合ニ於テハ、其必要ニ應ジ精細簡略種々ニ行ハレルガ、何レニシテモ原則トシテハ「レントゲン」診査、殊ニ寫眞診査ヲ行フコトニシテ置カネバナラナイ。

集團檢診ノ場合ニハ自ラ趣ヲ異ニシテ居ル、即チ集團檢診ニ在リテハ全部ノ者ニ「レントゲン」寫眞診査ヲ行フコトハ不可能ナル故(今日ノ間接撮影ハ別トシテ)先以テ一般診査就中 1、2 ノ特殊診査ニ依ツテ、「レントゲン」寫眞診査ヲ要ス

ル者ヲ選擇シヤウトスル時、主トシテ如何ナル徵候ニ着目シテ集團檢診ヲ行ヘバ、「レントゲン」寫眞ニ肺結核病竈ヲ有スル者ヲ最も好ク發見シ得ルカノ研究ニ就テハ、吾々ハ健康診斷ノ唱道、實行ニ着手シテ以來、學界ノ進歩ニ伴ツテ 3、4 期ヲ經驗シタ其大體ヲ次表ニ纏メテ見タ。最初ハ Subfebrile Temperatursteigerung ガ診斷治療ノ基礎ノヤウニ考ヘラレテ居タ時代デアツテ、偶々日本人ニ微熱程度ノ高體温所有者

第1表 集團檢診經過表

1 期	市療看護婦(大正14年)	「レントゲン」診査ノ必要ヲ説ク
	跡見女學校(大正15年)	檢温ニ學校ヨリ微熱ノ發見ガ恐レラレタル時期モアリ 微熱ヲ有スル人意外ニ多シ
	市、看護婦學校(大正15年) (昭和2年)	
2 期	敬愛小學校(昭和4年來)	微熱ニハ不明ノ原因ニ依ルモノ多キコトガ分ル
	野方小學校(昭和4年來)	赤沈ニ重點ヲ置ク、「ツ」反ニ就キ生徒ノ家庭ニ問フ 態ズルモノナン。定期診査必要トナル
	家庭衛生普及會(昭和4年來)	
3 期	某々幼稚園(昭和11年來)	年々ノ定期診査ヲ行フ
	某鐵工場(昭和11年來)	「ツ」反ヲ恐ル、者ナン
	某官廳従業員A(昭和10年來)	初感染問題重要トナル
	某印刷會社B(昭和11年來)	赤沈其他的確ノ微候ナン
	某電機工場C(昭和11年來)	間接撮影ノ應用
	市療講習生D(昭和14年)	昭和13年春ヨリ戰時下工場結核防遏ノ必要ヲ唱道ス

(註) ABCDハ第2表ニ集團名ヲ略示スルニ備フルモノ

ノ非常ニ多イノニ氣付イタ當時、デアツタカラ(昭和2年結核第5號石川友示氏ト共述、所謂健康者就中生徒ニ於ケル檢温成績)第一ニ微熱ヲ目當テトシタ、然ルニ病竈發見率ハ甚ダ少ク、又其後數年間觀察スルモ、ソノ微熱所有者カラノ肺結核發病ハ甚ダ稀デアツテ、加之結核未感染者ニモ微熱所有者ノ多キ事實ヲ見タノデ、之レヲ不明ノ微熱トシテ輕ク見ルコトトナツタ。當時又頸腺腫脹等モ調査シタガ(昭和5年結核第5號田澤秋作報告、檢温ヲ中心トスル生徒健康診査ノ成績)結果ハ同様デアツタ。次ニハ赤血球沈降速度ニ頼ツタ時代モアツタ、其他又能フ限り各種ノ檢査ヲ行ツタ、而シテ此ノ經過ノ中ニハ檢温サヘ

モ實行困難ノ社會事情ニ遭遇シタ時代アリ、又「ツバルクリン」皮内反應ヲ生徒父兄ノ1人モガ希望シナカツタ時代モアツタ(第1表參照)。ソノ診査方法ノ内「レントゲン」診査ハ從來ハ透視ト普通ノ寫真診査トノ二ツデアツテ、大體ニハ現場ヘ出張シテ爾他ノ諸診査ヲ行ヒ、ソレニ依ツテ病竈ノアルラシキ嫌疑者ヲ選ビ、ソノ者丈ケヲ病院ノ方ヘ呼ンデ「レントゲン」診査ヲ行フ方法デアツタカラ、「レントゲン」診査ニ呼バベキ者ノ選擇ガ骨ノ折レルーツノ難問題デアツタ、然ルニ昨年カラハ間接撮影ヲ應用シタモノデハ大ニ狀況ガ違ツテ來タ、スクシテ諸種ノ診査方式ト「レントゲン」診査諸法トヲ組合ハセ、一面受診團體ノ目的希望ニ應ジツ、或ハ精細

第2表 集團檢診諸方式表

所	人員	診 査	「レントゲン」	診 査
A ₁	427	診察、血壓、「ツ」反赤沈、補結、肺活量、「檢痰」身長、體重	「フィルム」 106人	
C	2087	同	「フィルム」 「ペーパー」 208人	
B	212	同	間 接 69人	「ペーパー」 「フィルム」 18人
A ₂	257	診察、「ツ」反、赤沈、(檢痰)	間 接 219人	「フィルム」 27人
A ₃	34		間 接 34人	「フィルム」 4人
A ₄	80	診察、赤沈、(檢痰)	(「ポータブル」透視)	希望者寫真等
D	32	A ₁ ト略同ジニテ毎2ヶ月檢査モアリ、(檢痰)血球像	「フィルム」 毎2ヶ月	診 査

(註) ABCDハ第1表ノ集團名ヲ示スモノ、Aノ1,2,3,4ハ各種ノ組ニ分ケテ行ヒタルモノ、(檢痰)ハ喀痰提出ヲ命ジタルモ持參セザルモノ

＝或ハ簡略＝種々ナ方式ヲ實行シテ見タ(第 2 表)。斯克シテ諸種ノ診査方法ニ依ツテ集團檢診ヲ行ツタ成績ノ詳細ハ後日ノ發表(近イ中ノ「結核」ノ豫定)ニ譲リ、茲ニハ其結果ニ就テ一言綜括的ニ述ベルト

「1 回ノ診査ニ於テ、一ツノ徵候ヲ捉ヘ、ソレヲ目當ニ「レントゲン」診査ヲ行ヘバ集團檢診ニ於ケル病竈ノ發見ガ容易デアルト云フヤウナ的確ナモノハ見當ラナイ、他ノ不明ナ原因ニ依ツテモ相似タ状態ガ多ク起ルトイフ徵候ガ多イ、但シ繼續的ニ診査シテ居ル途中カラ今迄ナカッタ症候ガ新タニ現ハレテ來タ場合ニハ大ニ警戒ヲ要スルモノアルヲ見タ」

ト云フコトニナル、今諸徵候ノ内、茲ニ一言シテ見タイノハ微熱ノ問題ト、定期診査ニ於ケル「ツベルクリン」皮内反應反復ノ期間研究ノ問題ト、病竈發現時ノ症候ニ關スル 1、2 ノ所見デアル、又咯痰検査ノ意義等ニ就テハ後條ニ述ベル。健康診斷ノ場合微熱問題ニ於テ考ヘラレルハ左ノ諸點デアル。

1. 結核症ニ關係ナキ不明ノ微熱ガ大多數ナリ、徒ラニ焦慮セシメヌコト
2. 外來受診者ノ訴ヘノ中微熱ハ最モ多シ(感冒後等)此點ニ依リ微熱問題ハ健康診査普及ニ寄與セリ
3. 微熱アル者ニ隱レタル結核症アレバ無熱ノ結核症トハ大差アリ、結核症ノ有無ニ就キ一應ノ精査ヲ要ス
4. 恢復期運動量増加ノ際不明ノ微熱ニ迷ハサレ無益ニ長ク拘束スルコトナキヤウ注意ヲ要ス
5. 以前ニ無カリシ繼續性微熱新ニ發スレバ警戒ヲ要ス、平素折々 2、3 日以上繼續檢温ヲナシ置ケバ診斷ノ際有益ナリ
6. 神經性其他各種疾患ノ微熱ヲ發スルモノトノ鑑別ヲ要ス

「ツベルクリン」皮内反應反復ノ期間問題

初感染時期ノ發見ガ重要トナルニ從ツテ、定期健康診査トシテハ「ツベルクリン」皮内反應反復ノ期間ヲドノ位ニトルカハ重要ナ問題トナツテ來ル、昭和 12 年ノ本總會ニ於テ有馬賴吉君ハ毎月「ツベルクリン」皮内反應ヲ追究スルヲ危険

トシ、「ツベルクリン」皮内反應ヲ無用トスルトマデ極言サレ、諸氏カラ多クノ議論モ出タ、其當時自分モ追加トシテ「ツベルクリン」反應陽轉ノ翌月、翌々月等ニ既ニ明カナル肺浸潤、肋膜炎等ヲ起シタル病例ヲ太田氏ノ例ニ於テ見タ事アルヲ述ベタガ、自然ニ發シタモノカ、「ツベルクリン」反應カ發病ヲ促進シタモノカノ判斷ハムヅカシイト考ヘタ、吾々ノ集團檢診デハ通常、毎年 1 回宛行ツテ來タガ、前ニ述ベタ如ク、陽轉ノ翌月又ハ翌々月ニ著變ノ現ハレルモノモアリ得ルニ於テハ、モツト早期ニ發見シタキ病例多カルベキ筈故、何等心配無ク短期ニ反復シ得ルノ期間ヲ研究シ兼ネテ稀釋度等トノ關係、爾他ノ「ツ」反術式トノ選擇如何等ノ點モ明カニシオクコトハ定期健康診査ノ上ニ於テハ殊ニ重要デアル。此ノ目的デ東京市療養所ノ過去 16 年間ノ看護婦及ビ同見習生ニ就キ第 3 表ノ如ク分類シテ患者數ノ發生狀況及ビ其ノ病狀等ヲ調査シ、之レニ諸種ノ條件ヲ參酌シテ判斷シテ見タ。

第 3 表

大正 13 年—昭和 6 年ノ 8 年間(「ツ」反施行セズ)	講習生 261 看護婦 1526	> 1,787 人
昭和 7 年—14 年ノ 8 年間(「ツ」反施行ス)	「ツ」反毎月ノ看護婦若干名ト爾他ノ大多數ノ看護婦ノ計	1,989 人
昭和 14 年	講習生 32 人「ツ」反半年(一部 4 又ハ 3 ヶ月)	

此ノ調査結果ハ單ニ數字ダケデハ決セラレヌ色々ノ條件ノ顧ミネバナラヌモノガアルノデ、詳細ハ後ノ報告ノ際ニ讓ルコトトスルモ、兎ニ角夫等ノ結果ニヨリ毎月追及ノ可否ニ就テハ一應慎重ニ検討スル必要アルコトヲ感じ居ル。之等ノ關係デ一方ニハ又「ツベルクリン」反應ヲ行ハズシテ爾他ノ症候ニヨリ初期ノ病竈ヲ發見シ得ザルヤニ就キテモ考究シタガ、毎 2 ヶ月ノ健康診査ヲ繼續シ行キタル者ニ於テハ、先ヅ以テ違和ニ氣付キ然ル後初メテ「レントゲン」線寫眞、「ツベルクリン」反應等ニヨリ陽性ノ結果ヲ確カムルヲ得タモノモアリ、又「レントゲン」寫眞ニテ初メテ多少ノ疑問ヲ起シタ如キ者モアツタガ、何レモ著明ナ病者ニハ至ラズニ濟ン

ダ。其際症狀トシテ氣ヅカレタモノハ、熱、脈搏頻數、赤沈増加、血壓下降、體重減少等ノ變化、或ハ感冒症狀、疲レ易キコト、食慾不振等デアツタ(後條(3)(A)参照)

症候ノ方カラノ診斷難ガ上述ノ如クデアル今日トシテハ、集團檢診ニ於ケル間接撮影ノ效果ハ偉大デアル、健康診斷ソノモノノ使命トシテハ、病者、虛弱者、未感染者等ヲ診定シ、病者等ニハ醫師ニカカルベキコトノ注意ヲ與フレバー一應ソレニテ解決シタモノトシテヨイ筈デアル、少クトモ集團檢診ニ於テハサウデアツテ、ソレニハ間接撮影ハ最モ適切ナ方法デアル、殊ニ醫師ノ仕事ガ簡單ニナル點ニ於テ從來ノ諸診査ニ比シ大ナル特徴ガアル、然レドモ治療豫防ノ實際的指導ヲナス上ニ於テハ更ニ精査セネバナラナイ、個人診査ニ於テハ如何ナル程度ノ治療豫防ニ該當スル状態ナルカヲ信念ヲ以テ診定スルコトガ必要ナル故、初メヨリ普通ノ直接撮影ヲ原則トスベキデアル。吾々ハ一昨春來戰時下工場結核ノ防遏ノ急務タルコトヲ唱ヘテ、研究ニ努メタノデアルガ、其結論ノ第1要點ハ間接撮影装置ノ運搬用ノモノガ製作サレ(此ノ製作ヲ昨年澁谷製作所ニ交渉シタガ今日デハマダ困難トノ事デ其儘トナツタ)各工場ニハ取締規則ヲ以

テ、ソレニ適スル電氣「コンセント」ヲ備ヘシメ、定期定期ニ其場所ニ行キテ、簡便一診査スルコトノ實現ヲ圖リ、法令デ勵行ヲ期スル以外ニハ今日ノ繁忙ナル工場ニ對シテハ有力ナル健康診査普及ノ道ガナイトイフコトデアル、警視廳工場課ノ依囑ニ依ル仕事デアリ、又三井報恩會ノ援助ノ下ニ行ハレタ研究デアル故、特ニ之レヲ述ベテ謝意ヲ表シテ置ク。

繼續的診査ニ適當ナル健康診査用「カード」ノ形式ノ共通的ナルモノヲ協議決定シテ、世間一般ニ應用セシムルコトハ、健康診査普及上最モ必要ナ一問題デアル。之レニ依テ平素ノ記載ガ保存セラレルト、新タニ發シタル徵候ノ判斷ガ早イ、例ヘバ體溫ノ如キモ2、3日間以上宛繼續檢溫シタモノヲ記載シテオクト、熱候ノ發シタ時所謂不明ノ微熱トノ區別ガ容易デアル、此ノ「カード」ハ單ニ結核用トイフ如キ感ジヲ與ヘヌ方ガ有益デアル、又缺陷ヲ記入スル外、注意事項、治癒實績等モ記入シ得テ、健康診斷ガ單ニ病者摘發ノ方法ノ如キ感ジヲ與ヘズ、疾病ノ豫防、生命ノ延長、活動能力ノ維持發達ニ資スル方法タル如キ意味ニ理解セラレルヤウ注意スルコトガ現在ノ所定期健康診査普及ノ困難ナル一面ノ事情ヲ克服スル上ニ殊ニ必要デアル。

(2) 診斷結果ノ處理ニ關スル問題

處理方法ヲ考ヘルニ就テハ、如何ナル程度ノ處理ヲ要スル者ガ、ドノ位ノ數ニ上ルカヲ先ヅ以

テ知ラネバナラナイ。

(A) 病竈ノ發見率ニ就テ

昭和12年ノ本總會(結核第15卷第5號、定期健康診査ト職業乃至職業療法ノ關聯)ニ於テ、吾々ノ集團檢診ニ於ケル肺結核患者ノ發見率ハ「全人員ノ2%餘ニ當ル人數ニ肺結核患者ト稱スベキ徵候ヲ發見シ、ソノ2、3倍或ハ尙ソレ以上ニモ當ル人ニ夫々豫防的注意ヲ要スル」トイフ成績デアツタ事ヲ述べ、之レハ概略ノ診査ニ依ル成績ダトシテ置イタ(但シ寫眞ハ各人背腹

方向1枚宛デアツタ)、併シ實際ニハ病竈ノ發見率ハ、如何ナル程度ノ「レントゲン」像カラヲ問題トスルカノ標準ノ取り方ニ依テ大ニ異ルモノデ、吾々ノ所デモソレニ依ツテ色々ナ数字ガ出テ居ル。例ヘバ初感染者ナドデハ僅カノ陰影モ問題ニスルコトニナリ、活動性症狀ニ似タ徵候ヲ有スル者ニ於テモ亦同様デアル、反對ニ又相當明カナ病竈ガアツテモ、何時ノ頃ヨリ同様

ノ状態デアルカノ既往症ヲ能ク聴取シタリ安靜休養仕事ハドンナ状態ニ在ルカヲ能ク糺シタリスルト、比較的安心ニ扱ハレル者モアル、故ニ處理ノ方法、程度ヲ標準トシテ診斷スルト(換言スレバ「如何ナル處理方法ニ該當スル病狀ナルカ」ヲ診斷スルトイフ考ヘデアルト)「レントゲン」像ダケニ就テ判斷スル場合トハ餘程違ツテ來ル。處理ノ方法、程度ヲ標準トシテ考ヘルニ就

テハ、受診者ノ事情ヲ考慮ニ入レネバナラヌコトモアルガ、ソレハ學術的良心ニ背イテスルトイフ譯デハナク、其根本ノ理由ハ結核病ノ特性トシテ其豫後経過ガ非常ニ廣イ範圍デ動搖スルモノデアルトイフコトカラ來ルモノデ、ソレハ廣ク各種ノ方面ノ患者ヲ扱フニ連レ、益々強ク認メラレテ來ル經驗上ノ事實デアル、其點ヲ次項ニ於テ述ベテ見ヤウ。

(B) 病狀、経過ニ就テ

前記昭和12年ノ本總會ニ於テ健康診斷ニ依ツテ發見サレタ肺結核患者ハ、著明ナ病竈ヲ持テ居テモ意外ニ能ク仕事ニ堪エテ居ルコトヲ述ベテ置イタガ、從來ノ普通ノ患者ヲ扱ツテ居タ御同様トシテハ相當ナ違ヒガ感ゼラレル、單ニ仕事ニ堪エルト云フバカリデナク生命ニ對スル豫後モ亦意外ニ良好デアル。

安靜休養ヲ必要トスル根本原則ハ固ヨリ不動ノ大方針デアルガ、ソレニ就テモ從來普通ノ肺結

核患者ヲ扱ツテ戰々競々其ノ作業程度ヲ考ヘテ來タ者ノ頭ニハ、ドウシテモ意外トイフ感ジガ起ル、ソレデ患者ノ社會的事情モ酌ンデ適當ナ指示ヲ與ヘルトイフコトノムヅカシサガ感ジラレル、今東京市療養所ニ於ケル多數ノ患者ノ所見ヲ中心トシテ、之レニ種々ナ方面ノ觀察ヲ比較シテ見ルト、大體ニ其ノ概念ガ得ラレル。

現今ノ我邦下層階級ニ於ケル肺結核患者ノ死亡率ヲ知ル一助トシテ、東京市療養所患者ノ生退所ト死亡退

第4表 輕症(療養練習者等)ノ比較的多ク入院スル市内某病院一部ノ概況
昭和3年12月1日ヨリ昭和12年2月末迄ニ入院セシ者ノ調査、15年2月末日現狀ノ判明セル者ニ就テ

東京市療養所患者ノ経過一般
昭和7年中有料入所患者全部

仕事程度 期間	仕事程度					死亡	計	生退所	死退所	計
	普通	七八分	五分	二三分	○					
10日以内						29	29	9	71	} 315 } 392
1ヶ月以内						29	29	35	104	
2ヶ月以内						27	27	49	78	
3ヶ月以内						13	13	36	62	
6ヶ月以内						19	19	70	77	
1年以内						12	12	58	61	
2年以内						10	10	54	31	
3年以内						8	8	13	11	
4年以内	34	5	4	3	2	4	52	8	3	
5年以内	26	1	2	3	6	6	44	8	3	
6年以内	30	1	1	4	9	3	48	3	0	
7年以内	29	3	0	3	2	2	39	1	0	
8年以内	30	2	0	1	0	0	33	1	0	
9年以内	34	0	3	0	2	2	41			
10年以内	38	0	0	1	1	1	41			
11年以内	28	1	0	1	0		30			
12年以内	3	0	0	0	0		3			
	252	13	10	16	22	165	478	345	501	846

第 5 表 恢復期訓練患者(非開放性)ノ經過
(東京府靜和園共同調査)

*觀察期間ハ東京市療入所ヨリ東京府靜和園
又ハ退園後ノ昭和 14 年 4 月末迄
*仕事程度ハ在園中ノ狀況ヲ記ス、其後一層
良ナル者多シ
*仕事程度Ⅲハ重イ仕事、Ⅱハ中等度、Ⅰハ
輕イ仕事

觀察期間	仕事程度						計	死亡
	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	散歩	安靜			
(1年以上) 2年以内	2					2		
3年以内	5	2	5	6	1	19	1	
4年以内	16	8	2	2	1	29	3	
5年以内	22	9	2	6	5	44	2	
6年以内	16	8	3	1		28		
7年以内	14	2	1		2	19	1	
8年以内	3			1	1	5		
9年以内					1	1		
計	78	29	13	16	11	147	7	

昭和 14 年 4 月末日現在 良 98 中 42 不良 7

所トノ割合ヲ見ントスルニ、本所ノ無料入所希望者ハ
申込後ノ停滯ガ長キ時ハ 11 ヶ月餘ニ互レルコトアリ、
現在大ニ減シタルモ尙 6、7 ヶ月ヲ要スル状態
ニ在ルヲ以テ、其間ニ死亡スル者が大多數テ、社會
ノ實情ソノ儘ヲ表ハスモノト見ルコトガ出來ナイ、有
料入所者モ今日ニテ、ハ申込後普通 2、3 週間乃至 1 ヶ
月位ヲ要スルガ、昭和 7 年ノ有料開始當時ニハ大體申
込後 2、3 日中ニ入所シ得ラレタノデアルカラ、今試
ニ昭和 7 年中ニ入所シタ有料患者ニ就キ生退所、死亡
退所者ノ結末ヲ調査シタルニ左表ニ示ス如ク生退所
345 名ニ對シ死退所ハ 501 名テ而カモ 3 ヶ月以内ノ
死亡者ハ其内 315 名、半年以内ノ全死亡者ハ 392 名ニ
達シテ居ル、之レハ今日ノ東京市内ノ下層階級ニ於
ケル肺結核患者病勢ノ一般ヲ示スモノト見ルコトガ
出來ル。

之レニ比較スル爲メ、健康診査ニ依リ發見サレタル輕
症良性ノ患者ガ療養練習ノ目的テ入院スル攝養室ト
普通ノ病室トヲ兼ネ定期受診ノ風習養成ニ努メテ居
ル成器寮醫館(東京舊市内ニ在リ)ニ於テ昭和 3 年
12 月 1 日ノ開院以來昭和 12 年 2 月末日迄ニ入院シ
タル全結核患者ニ就キ、昭和 15 年 2 月末日現在ノ狀況
ヲ退院者ニ照會シタル答申ヲ綜合スルト左表ノ通り
ニナル、之レニテハ最モ新シキ患者ニテモ入院受療ノ

初メヨリハ既ニ 3 年ヲ經過セルヲ以テ、單ニ生存セル
ノミニテモ大體ハ良好ノ經過ト稱シ得ルデアラウガ、
其仕事恢復者ノ率モ極メテ良好ニテ、大部分ハ普通ノ
仕事ニ従事シテ居ルコト左表ノ通りテアル、斯カル病
院ニテモ現在ノ社會状態ニ即應シテ死亡前ニ驅ケ込
ム患者ノ相當數ニ達スルコト止ムヲ得ザル所デア
ツテ、半年以内ノ死亡者ヲ全員中ヨリ差引クト大多數
(約 70%)ガ普通ノ仕事ニ服シ居ルト云フコトが一層
ニ顯著ニ感セラレ、(但シ此外照會ニ對シテ返事ノ
來ナイ者 262 名ト死亡時日不明者 53 名ガアル)。

此ノ成器寮ノ成績ヨリ尙一層良好ノ成績ヲ呈スルモ
ノハ東京市療養所ヨリ東京府立清瀨病院へ送ツタ患
者デアツテ、其成績ハ昭和 14 年 4 月末日現在テ退園
患者ニ照會シタル答申ト、現在ノ在園患者全部ニ就テ
調査シタルモノデア、但シ此ノ良成績ヲ示ス 147 名
ハ同一期間内(昭和 9 年 9 月ヨリ同 13 年末迄)ニ東京
市療養所ヨリ生又ハ死退所ヲナシタル總數約 6000 名
ノ内、自ラ志望シテ入園シタル最モ理解アル非開放性
ノ患者デア、故ニ東京市療養所ヨリモ斯ル良成績
ヲ呈スル卒業者ノ出ヅル事ト、非開放性患者ガ經過
ノ良好ナルコトト恢復期指導ノ效果トヲ示スモノト
見ラレルノデア、其入園ハ今日迄ノ所、別ニ制限
ヲ受ケタ事ハナカツタノデ、東京市療養所退所者ニ
ハ斯カル程度ノ恢復者ハ事實非常ニ少ナカツタコト
ヲ示スモノト見テヨイ。

以上 3 種ノ病院ノ比較ハ夫々違ツタ條件ノ下ニ
調査セルモノ故、一律ノ條件ニシテ比較スルト
云フコトハ出來ナイガ、ソレデモ大體ノ趨勢ハ
明確ニ示シテ居ルモノト云フコトガ出來ル。

各種病院ノ成績ヲ檢討シ來リタル上、更ニ一段
ト健康診査ニ依リ發見サレタル患者ノ經過良好
ナルニ驚カサレル事實ハ左表ニ示ス一集團ノ成
績デア、健康診査ニ依ツテ發見サレタ左表ノ
要監察者及要治療者ハ「レントゲン」寫真ニ依
ルト相當ニ著明ナ病變ガ認めラレタモノデ要監察
者ノ如キハ、大「マケ」ナド云ツテ寫真ヲ見タ程
デアツタノニ、其ノ後全ク本人一モ告知スルヲ
得サル事情ガアツテ、自然ノ儘ニ放任シテ來タ
所、2 年 8、9 ヶ月後ニ於テ尙平然ト普通ノ勤務
ニ堪エ居ル者多キ實情デア、此ノ寫真ハ東京
市健康相談所長諸氏ト、東京市療養所醫局員ト

第6表 普通生活ヲ營ミツ、アル病竈所有者
(I) 昭和十年六月上旬一七月中旬健診成績

總人員	13851
B ₁	1213
B ₂	238
C	161

ニテ協議熟覽シタモノデアツテ、其後ノ經過ハ既ニ前記昭和12年ノ本總會ノ演說中ニモ之レヲ異トシテ述ベタルデアツタガ、今更ニ一年以上ノ經過ヲ觀察シ得タルヲ以テ、重ネテ報告シテ置クノdeal。

(II) 昭和13年3月25日現在
(2年8、9ヶ月ヲ經タル後)

	B ₂	C	計	
	實數	實數	實數	%
死亡	13	28	41	10.3
退職	51	23	74	18.6
在職	169	110	279	69.9
不明	5		5	1.2
計	238	161	399	100

B₁=要注意者 B₂=要監察者 C=要治療者

(C) 處理方法ニ就テ

職業、作業 處理方法トシテ第一ニ問題トナルモノハ日常ノ仕事ヲドウスルカデアリ、ソレト生命ノ危險如何ノ問題トノ對照考察ガ日々ノ仕事トナル譯デアルガ、病狀ニ依ツテハ仕事能力ガ意外ニ良ク保存セラレテ居ルコトガ認めラレ、ソレニ依ツテ結核豫防事業ノ目的ハ死亡率ノ減少ト職業繼續ノ能力維持ト二ツニ歸スルコトガ當然ノ事ナガラ今更ノ如クニ感ゼラレテ來ル。治療法トシテ見テモ、職業療法ハーツノ精神療法トシテ有效デアルカラ、身體運動ヤ精神ノ仕事ノ許サレル限リハ職業、作業ノ意味ニ應用スル工夫ガ效果デアル、病氣アルコトヲ知ラズニ職業ヲ續ケテ居ル者ガ意外ニ經過ガ良イトイフ事實モ、カウイフ點ニ於テ一面ノ暗示ヲ與ヘテ居ルモノト考ヘラレル。又其ノ仕事ノ種類方法モ精神療法トシテ有效ナヤウト考ヘテ選擇スベキデアル。

昭和9年ノ本總會ニ於テ述ベタル「作業療法ニ就テ」(結核第12卷第5號中野貞夫、伊藤秀三兩氏ト共述)及ビ昭和12年ノ本總會ニ於テ述ベタル「定期健康診査ト職業乃至職業療法ノ關聯」(結核第15卷第5號)ハ、上記ノ必要ヨリ自然ニ起ツテ來タ研究デ、要スルニカウイフ意味ニ應用セラレル仕事程度ノ標準ノ研究デアル、昭和12年ニ掲ゲタル仕事程度表ハ、從來其場所ニ於テ仕事ヲ適當ニ十階段ニ分ケテハ實行シテ居タ概念ヲ以テ、之レヲ最モ簡單ナ勤務者生活ニ

當テ嵌メテ大體ノ標準トシテ示シタモノデアアル、此ノ標準ハ1例ニ過ギナイガ、要ハカウイフ標準ノ研究ガ必要ダトイフ點ニ在ル。病人ニ於テハ普通ノ人ノ想像モ出來ナイヤウナ嚴重ナ安靜カラ始メテ、次第次第ニ運動ヲ高メテ行クコトガ療養法ノ根本デアルガ、今其精神ヲ健康診斷ニ依ツテ發見サレタモット上ノ健康度ノ者マデ及ボシテ行カウトスルノdeal。

第7表 職業療法、仕事程度表

I度	輕易ノ仕事 短時間ノツニ分ケテ行フ	2時間以内
II度	”	4” 午前午後ノ安靜時間ヲ廢セヌコト
III度	”	6” 午後ノ安靜時間ヲ廢セヌコト
IV度	”	8” 其ノ他ハ正規ノ療養生活 又ハ輕業勤務2” (短時間出勤)
V度	”	4” (半日出勤)
VI度	”	6” 午後ノ安靜時間ヲ要ス
VII度	”	8” 在宅時間中安靜ヲ要ス 又ハ普通勤務2” (短時間出勤)
VIII度	”	4” (半日出勤)
IX度	”	6” 午後ノ安靜時間ヲ要ス
X度	”	8” 在宅時間中安靜

死亡率減少 結核豫防事業ノ實績批判乃至實行

目標ハ(352頁参照)第一ニ地方別ノ對人口死亡統計ニ依ルコトトシ他ノ目的事項ハ之レニ並行セシムルニ努ムルコトガ適切デアルガ、ソレニ就テハ住所別ノ死亡統計ガ望マシク、從ツテソレヲ確實ニスル爲メ醫師ノ死亡診斷書ニ住所ヲ記入セシメルコトガ望マシイ。

一地方ノ人々ニ對シテ死亡率ヲ減少セシムル最大ノ要因ハ健康診斷ノ普及勵行デアリ、發見セラレタル虛弱者及ビ病者ニ對スル指導ノ徹底デアル、之レニ比スレバ我國内ノ各地ニ於ケル氣候等ノ如キ地方的差違ニ依ル相異ハ殆ド問題ニナラザル程度ノモノデアル、故ニ死亡率ノ大小ハソレ等ノ普及徹底如何ノ調査方法トモナリ、從ツテ又ソレノ普及徹底ヲ餘儀ナクセシムル勵行方法トモナルノデ、之レガ普及徹底ヲ圖ル上ニ於テハ、同時ニ其地方ノ對人口發病率及死亡率ノ統計ヲ明カニスルコトガ望マシイ、現今ノ内閣統計局ノ死亡率統計ハ住所別デナク死亡場所別ノ統計デアルガ、ソレハ患者數ニ對スル治癒率又ハ死亡率ヲ知ルニハ適スルガ全人口ニ對スル發病率又ハ死亡率ヲ知ラウトスルト時ニ大ナル誤差ヲ來スコトガアル、例ヘバ東京市中野區ニ於テソレノ甚ダシキ實例ヲ見タ、故ニ少クモ各地方ヲシテ相競ハシムルニハ迫力ヲ有シナイ。之等ノ詳細ニ就テハ昨年ノ本學會ニ於テ述べタ通りデアルガ、(死亡統計作成ニ就テ、結核第15卷第5號)其後モ何ントカシテ實現ヲ期シタイモノト考ヘテ、機會アル毎ニ其意見ヲ述ベテ居ル次第デアル、重複ノ嫌ヒハアルガ昨年ノ本會ニ於テ表示シタル希望事項ヲ重ネテ左ニ掲ゲテ置カウ。

地方別死亡統計

希望事項

- (1)内閣統計局ノ現行死亡場所別統計ノ如キ權威ヲ以テ住所別統計ノ作成サルベキ事
(内閣統計局ヨリ配布ノ小票ニモ住所欄ヲ設ケラレタキ事)
- (2)上記統計ノ正確ヲ期スル爲メ醫師ノ死亡診斷書ニ住所ヲ記入セシムベキ事
- (3)右統計ハ迅速ニ各役所ニ於テ作成發表スベキ事

(4)死亡統計ニハ死亡場所別、住所別ノ區別ヲ記入スベキ事

(發病地別統計ガ作成シ得ラルレバ理想的ナルモソレハ困難ナルベキ故ナルベクソレニ近キ住所別統計ヲ望ムモノトス)

第三ニ收容施設ニ就テ考ヘラレルモノ、一ツハ大人「プレベントリウム」デアル、外國デハ「プレベントリウム」ハ兒童ヲ容レル所ニ就テノミ云ツテ居ルガ、日本デハドウシテモ青少年者等ノ勤務、通學ノ勞力ヲ減ラシテヤルトイフ考ヘテ根本トシテ作ラレタモノガ必要デアルトシテ、以前カラサウ考ヘタノデアル。ソレハ私ノ經驗デハ肺結核ノ患者ガ此年齡ノ者ニ多イトイフ許リデナク、ソレノ發病豫防ニハ左程長年限ヲ見込デ置クヲ要シナイトイフ例ガ以前カラ相當ニ多ク見ラレタ事ト、兒童ニ對スル施設ノ呼ビ聲ハ各方面ニ高く、種々ノ施設ガ設立サレルガ、最モ重要ナ青少年壯年者ハ社會カラ放任サレ勝チデアルコトヲ以前カラ遺憾トシタ事トノ理由ニ依ルノデアル。(學校衛生昭和3年10月號、學生ノ寄宿舎生活ニ就テ、「豫防醫學實地」開拓ノ爲メニ)私ハ嘗テ斯カル施設ヲ寄宿舎ノ如キ意味デ實行セシメ、之レヲ攝養室ト呼ンダコトガアル。又ハ轉地ヲ適當トスル程度ノ者ノ爲メニ保健鍛鍊所トイフテ作ラシメテ見タコトガアル、ソレ等ハ何レモ入所希望者ガ少クテ事業ソノモノトシテハ成功シナカツタガ、結核豫防上ノ成績トシテハ極メテ有效デアツテ、結核病ハ輕イ中、良性ノ中ニ少シク規則的ニ指導スレバ、重クナツタ者ニ非常ニ嚴ニ勵行スルニ比シテ遙カニ效果が大キイトイフコトヲ如實ニ痛感シ、健康診斷ノ效果ヲ示ス上ニ於テモ斯カル處理方法ガ極メテ必要デアルト感ジテ居ル((3)(C)參照)。

個々ノ指導方針、鍛鍊方針等ニ就テハ大體ニハ省略スルガ、次章ニ於テ唯其ノ1,2ノ點ヲ述ベテ見ヤウ。

(處理方法中患者ノ隔離等ニ關スル事項ハ茲ニハ觸レズ)。

(3) 定期健康診査ト豫防的治療(又ハ治療的豫防)

(A) 目的及ビ定期健診ノ反復期間

目的 (イ) 定期健康診査ノ第一ノ目的ハ診斷ノ爲メノ觀察期間ヲ取ルコトデアル、健康診斷デ問題トナルハ通常ハ良性ノ病竈又ハ初期ノ病竈デアルガ、診斷トシテハ重症ノモノ、惡性ノモノヨリハ困難デアル、ソレデ誰ニデモ出來ル最モ簡單ニシテ確實ナ診斷方法ハト云ヘバ、度々反復診査スルトイフコト一ナル。之レハ定期健康診査ノ第一ノ目的デアツテ、詰リ觀察期間ヲ長ク取ルトイフ意味デアル。即チ診斷上ノ技術トシテ「時間」トイフ1項ヲ加ヘルノデアル。

一般ニハ健康診斷ノ目的ハ早期診斷ニ在ルト言ハレルガ、其外ニ又「自分ニハ全く氣付カズニ居タ者ニ」意外ニ進ンダ病竈ヲ發見シテ驚カサレルコトモ甚ダ多イ、或ハ寧ロ之レガ今日健康診斷ノハ筈數ク言ヒ出サレタ理由ダトモ云ヘル程デアルガ、カウイフ病竈ノ事ハ前ニ(二)(B)ニ於テモ述べタノデアルカラ、茲ニハ早期診斷ノ方ニ就テ考ヘルニ、健康診斷デハ一度施行シテソレデ眞ノ早期發見ガ出來ルトイフ事ハ寧ロ偶然ノ事ニ屬シ、合理的ニ系統的方法ヲ定メヤウトスレバ、ドウシテモ定期健康診査ノ方法ニ依ラネバナラナイ。

結核發病ニ就テ最モ警戒ヲ要スル時期ハ初感染時期デアルコトハ諸君(文獻ハ健診成績報告ノ際ニ讓ル)ノ研究デ明カナツタガ、ソレハ定期健康診査ヲヤツテ居ル者ニハ最モ確實ニ承認セラレル所デアル、初感染ニ續イテ發病スレバ勿論デアルガ、タトヒ發病トイフ程ニ至ラズトモ、少シデモ多ク其時期ニ病變ガ進ンデ居レバ、將來ノ危險ガソレダク大キイ、ソレデ一度ノ健康診斷デ未感染者トイフ事が明カナツテモ、未感染ダカラヨイトシテ放任スルデハナク、折々診査シテ初感染後ノ危險時期ヲ見通ガサナイヤウニ努メ、且ツ其時期ニ發病素因トナリサウナ事項デモアレバ、ソレノ矯正ニモ努メル、ソシ

テ遂ニ初感染時期ノ發見セラレタ受診者ニ對シテハ、別段ノ徵候ハナクトモ、又ハ僅カノ徵候ガアルノミデモ、特ニ警戒ヲ加ヘテ頻々診査觀察スルコト、シ、變化ノ少シク大キクナツタモノハ多少長期間ニ互ツテ警戒ヲ解カナイトイフコトニスレバ、乃チソレニ依ツテ發病期ノ結核症ヲ捉ヘテ眞ノ有效ナ早期診斷ヲ行フコトガ出來ル譯デアル。

(ロ) 定期健康診査ノ方法ハ診斷結果ノ處理方法ノ一ツトイフ意味デモ應用セラレル、前項診斷ノ爲メノ觀察期間トイフ意味モ、唯漫然ト日ヲ經ルトイフ意味デハナク、一程度ノ仕事ノ分量其他ノ注意ヲ處方シ、ソレニ從ツテヤツテ行ツテ、其先キ適當ナ期間後ニ再診査ヲシテ其結果ヲ見ルトイフ意味デアツテ、即チ一定ノ試験ヲシテ觀察スルトイフ意味デアリ、之レヲ診斷結果ノ處理方法ノ一ツト見ヤウトスルノデアル、逆ニ處理方法ヲ主トシ、診査ヲ從トシテ言ヘバ、一患者ニ對シテ或ル處理方法ヲ處方スルトキニモ、ソレノ適否如何ヲキメルニハ確實ナ尺度、標準トイフモノガナク、色々ナ條件ガ關聯スル複雑ナ問題デアルカラ、結局ヤツテ見テ其反應ニ依ツテ適否ヲキメルトイフ外ハナイ、恢復期患者ノ運動ヲ高メル場合ナドニモ、餘程經過ガ良クテモ、普通一度ニ大幅ニ高メルトイフコトハ出來ズ、ヤツテ見テハ確カメテ次第ニ高メ行クノガ安全デアル、ソレデ定期診査ハ自然ニ處理方法遂行ノ手段トナツテ來ル。

カウイフ考ヘデ患者ヲ扱ツテ居ルト、診斷トイフ言葉ノ意義モ少シ變ツテ來ル、即チ健康診斷デハ現在ノ變化ソノモノ丈ケデハナク、將來ノ豫後經過ノ上カラ見テ、如何ナル程度ノ仕事及ビ休養ニ該當スル状態ナルカ等ノ判斷ヲ下スコトガ最モ重要トナル、即チ處理方法判斷ガ診斷ノ主點トナツテ來ル。

此ノ處理方法トイフ意味カラ云ツテモ二ツノ場合ガ考ヘラレル、一ツハ所謂要注意者、要監察者等ニ對シテ、豫防の注意ヲ與ヘテ發病豫防ニ努メタリ、恢復期ノ者ニ再發豫防ノ注意ヲ與ヘタリスル場合デ、言葉通りノ健康診査ノ場合デアアル、他ノ一ツハ單ナル應用ノ意味ニナルノデアアルガ、輕イナガラモ明カニ病者ト診斷サレ、普通ノ治療ニ廻ハサルベキモノデアツテモ、病牀不足ノ今日、ソノ爲メ放任サレタリ、或ハ反對ニ患者ノ焦躁カラ徒ラニ頻々外來ヲ訪フニ任セタリスルヨリハ、適當ニ診査時期ヲ定メ一定ノ動作處方ヲ與ヘテ規律ヲ立テ、ヤルノガ有益ナ場合ガ多イ。

(ハ)單ニ受診ヲ促スノ意味デ定期診査ヲ行フコトモアツテ、全ク何等ノ問題ノ無イ人ニモ、1年1回トイフ如キハソレデアアル、ソレヲ誕生日健康診査(米國延命協會ニ從ツテ)ナドト稱シテ見タ事モアル((1)(A)参照)。

定期健診ノ反復期間 定期健康診査ノ間隔ハド

ノ位ニ取ルベキカトイフコトハ、目的ト所見ニ依ツテ違フノデアアルガ、ソレ等ノ點ヲ顧ミテ吾々ノ從來標準トシテ居タモノハ、昭和13年ノ本總會ニ於テ一ツノ表トシテ掲ゲタ事ガアル(結核豫防事業ノ諸分野ト觀察期間ノ取り方ニ就テ、結核第16卷第5號)今辭句配列等ヲ少シク修正シテ掲ゲテ見ヤウ、全然健康ト思ハレテ居ル人デモ1年ニ1回ハ診査スルコトイフコトヲ基準トシテ、各種ノ場合ニ割り當テ、大體ノ標準ヲ示シタモノデアアル。實際ニハ年齢等ニ依ツテモ相違シ季節等ニ依ツテモ多少ハ異ナリ(例ヘバ夏季ハ回数ヲ多クスルコトガ多イ)種々ノ條件ガ關係スルノデアアル、此表ハ理想トシテ掲ゲタモノデアアルカラ、實際ニ之レ丈ケノ回数ヲ行フコトハ相當ナ難事デアルトスルモ、原則的ノ標準ガアレバ、其他ハ適當ニ應用サレ得ルモノト思ハレル。何レニシテモ此表ノ内容ヲ主張スル譯デハナク、斯カル標準ノ研究ガ必要ダトイフコトヲ唱ヘルノデアアル。

第 8 表 定期健康診査反復期間表

1	普通ノ健康體ニシテ次ノ諸項ナキ者(既感染者)	發病豫防	1年1回
2	結核ノ素因ノ事項又ハ發病動機ノ問題トナル者(既感染者)	發病豫防	半年1回
3	療養卒業者ニシテ新ニ適當度ノ仕事ニ復シタル者	再發豫防	1,2ヶ月 } 3,4ヶ月 } 1回 半 年 }
4	初感染者	發病豫防	4ヶ月(又ハ2ヶ月) 1回
5	活動性結核症ニ似タル徵候アルモX線寫眞ニ確カナル變化ヲ認めラザル既感染者一診斷決定マテ	發病認否	1ヶ月1回以上
6	未感染者	感染發病豫防	半年1回
7	濃厚感染地帯ニ在ル者	感染發病豫防	4ヶ月(出來レバ2ヶ月) } 又ハ半年 } 1回

- (1)2—7ノ高度ナル者又ハ二ツ以上アル者ハ早キニ依ル
- (2)診査項目ハ各例ニ依ル
- (3)「レ」線診査ハ普通1年、半年、4ヶ月毎ニ、必要ニ依テハ2ヶ月毎ニ「フィルム」、「ペーパー」、間接撮影、透視ノ別ハ必要ノ程度ト費用ノ關係ニ依ル
- (4)「ツ」皮内反ハ定期健診トシテハ普通1年1回行ヘリ、研究トシ、又ハ必要ニ依テハ半年毎、又ハ3ヶ月毎ニモ行ヘリ
- (5)赤沈ハ必要ニ依ツテハ普通1ヶ月1回
- (6)一般的診査ハ適當ニ、檢温ハ2,3日以上繼續セルモノ
- (7)繼續的「カード」ヲ用フルコト

斯カル定期ノ診査モ凡テノ人ニト云ヘバ行ハレ難シトスルモ、結核ノ場合トシテ青少壯年者ノ發病シ易キ年齢ノ間ダケトイヘバ餘程行ハレ易

クナル、又誰シモ自分自身ノ事ハ行ヒ難シトスルモ、父兄ガ子弟學生ヲシテ受診セシムルコトナドハ案外行ハレ易イ。

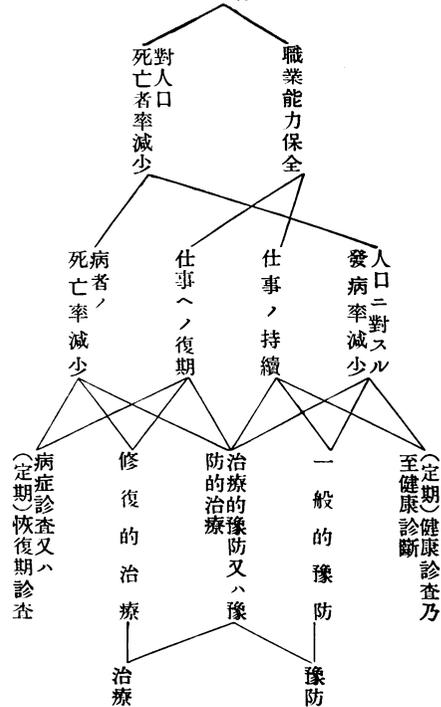
(B) 豫防の治療ト治療の豫防

結核症ノ治療ノ場合ニハ豫防の治療ノ考ヘガ必要デアリ、豫防ノ場合ニハ治療の豫防ノ考ヘガ必要デアル、此考ヘハ大正 15 年ノ本會總會ニモ述べ、(肺結核ノ一般療法、結核第 4 卷第 7、8 號)爾來度々述ベテ居ル所デアルガ、定期健康診査ノ實行モ亦、此目的ヲ遂行スル所以ノ重要手段デアル、此意味ニ於テ昭和 4 年ニ結核ノ豫防の治療ト定期健康診査トシテ述ベタ事モアル((3)(C)項参照)、今逆ニ定期健康診査ヲ基トシテ見ルト、治療の豫防又ハ豫防の治療ノ考ヘハ其診斷結果處理ノ方針トイフコトニナリ、ソレトシテハ最も適切ナ考ヘ方デアルト思ハレル。

豫防の治療又ハ治療の豫防ノ語ニ於テハ大體ニ於テ豫防ノ語ハ目的ヲ示シ、治療ノ語ハ技術ヲ示スモノト解シテオキタイ、即チ豫防の治療トハ治療ニ當リ、病症ノソレ以上ノ發展ヲ豫防スルトイフコトヲ目的トシテ行フ處置ノ意デアリ、治療の豫防トハ豫防ニ當リ、適當ナル治療技術ヲ應用シテ豫防目的ヲ達スルノ意味デアル。

今結核病防遏ノ重要項目體系ヲ表示シ、ソノ間ニ於テ定期健康診査及ビ豫防の治療、治療の豫防ノ考ヘガ如何ナル關聯ヲ有スルカラ考ヘルト右表ノ通りニナル((2)(C)項、死亡統計ノ問題ニ就キ、昨年報告(前出一死亡統計作成ニ就テ、結核第 17 卷第 5 號)ニ掲ゲタル表ニ、1、2 辭句配列ノ修正ヲ加ヘタモノデアル)次表ノ説明。健康診斷ヲ發見サレタル虛弱者又ハ良性病竈所有者ヲシテ適當度ノ仕事ヲ持續セシメルニハ、發病防止ノ考ヘテ、定期健康診査ニ依ツテ調節指導シテ行クコトガ必要デアルガ、ソレニハ一般的豫防方法ノ外ニ、各個人ノ素因の缺陷矯正等ノ治療技術ニ依ル豫防ガ必要デアツテ、而モ後者ノ方が重要デアル、又患者ヲ恢復サセテ漸次仕事ニ復歸サセル爲ノ治療ニハ病症診査ト修復の治療ノ後ニ、尙恢復期健康診査ト「再發豫防」目的トシタ治療的處置」ヲ意ツテハナラズ、而モ仕事復歸ノ上テハ後者ノ方が重要デアル、同様ニ人口對發病率ノ減少ニ對シテハ定期健康診査ト一般的及ビ治療の豫防方法ガ必要デアル、病者ノ死亡率減少ハ勿論普通ノ診査ト修復の治療ニ依ルノデアルガ、其外ニ尙一旦停止

第 9 表
ノ 結 核 防 遏 事 業
目 標



ニ傾イタ 後ノ再發豫防の診査治療ノ必要ニ就テモ十分指導ヲ與ヘネバナラナイ。

上表ハ是等ノ意味ヲ經メテ表ニシタモノデアル。上表ニ於テ、普通ノ病人治療ハ病竈ヲ修復スル意味デ、修復の治療トシテ豫防の治療ト區別シテ見タガ、ソレモ治療技術ノ上カラ見レバ同一デアツテ、意味ノ取り方次第トイフ點ノアル事モ考ヘテオカネバナラナイ、例ヘバ浸潤ノ吸收ヲ促サウト考ヘレバ修復の治療デアルガ、同ツ治療處置デモ浸潤ノ擴大トカ軟化崩壊トカイフ爾後ノ増悪ヲ豫防シヤウト考ヘレバ豫防の治療トナル、同様ニ又治療ト豫防トモ言ヘルヤウナ場合ニ於テハ同ツツノ處置ガ治療トシテ見レバ豫防の治療デアリ、豫防トシテ見レバ治療の豫防ト云ヘルヤウナ事モアツテ、ソレモ意味ノ取りヤウ次第トモ云ヘル。故ニ細カク論ズ

レバ議論モ出ヤウガ、兎ニ角健康診断ノ結果ノ處理方法トイフヤウナ場合ニハ豫防的治療トカ治療的豫防トカイフ考ヘ方ガ適スル事ガ多イ、ソシテ此方針ノ發達ハ、發病前トカ恢復期トカイフ如キ治療

效果ノ最モ上リ易イ時期ニ、漫然ト空過スル事ナカラシメル如キ風習ノ勃興ニ對シテ有意義テアル。又豫防的治療、治療的豫防ノ考ヘニ依ルト、治療方法應用ノ範圍ガ著シク擴大シテ來ル、今病症經過ノ上

第 10 表 定期健康診査ト仕事程度ノ組合ハセ實行例

(縦線ノ右ハ定期健康診査表、左ハ仕事程度表)

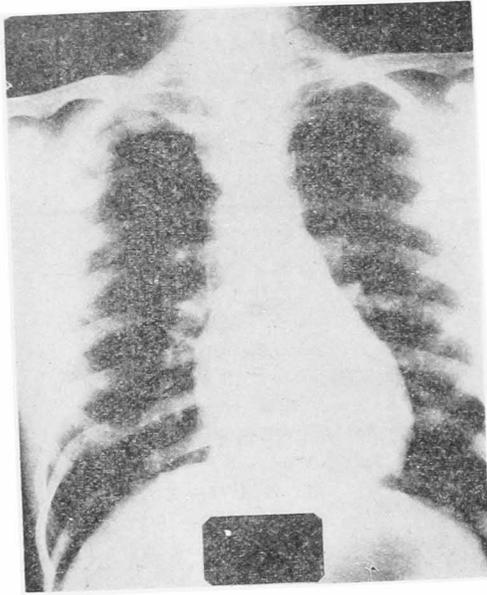
第 1 例 講習生 15 歳 女 體格纖弱

<p>14 年 1/V 採用 「ツ」皮内反(-)</p> <p>毎日一檢温、檢脈 毎月一體重 毎 2 ヶ月一赤沈、補結、「レ」線寫眞、診察 時々一血球像、血壓、肺活量、身長</p> <p>發熱-(22/VIII-6/IX) 採用時ヨリ 37.2、37.0 等ノ日多シ 上記發熱中ハ 37.7、38.1、39.0 等トモナル 此間脈數モ一般ニ稍ク増加ス 胸部:-左前側部吸氣時疼痛、時ニ咳嗽、理學的所見ナシ 一般症狀一頭痛、眩暈、貧血、疲レ易シ、氣分不良、食思不振(8/VIII 初潮、入院後氣分沈ミ勝ち) 「レ」線:-28/VIII 右側肺門淋腺腫脹 「ツ」皮内反:-26/IX 陽轉證明 赤沈 1 時間値:-1/V⁵、1/VII¹⁰、4/X¹⁰、15/X¹⁵ 補結:-每常(-) 血壓:-發病後稍ク減? 後、糠「エキス」ヲ與フルモ殆ンド増加セズ、輕勤時ニ至リ漸増 體重-發病時僅カニ減、輕勤時ニ至リ漸増</p>	<p>入院 28/VIII-退院 30/X</p> <p>初メ安靜ノミ、次テ輕度ノ仕事ヲナス 即チ:- I 度 食堂手傳等 2 時間 15/IX-25/IX II 4 .. 26/IX-3/X III 6 .. 4/X-12/XI IV 病室ヨリ講習ヘ 13/X-7/XI 講習 2 (又ハ 3) 時間 復習 1-1.5 時間 V 講習ノ外輕業勤務 1 時間 「カ」仕事ナシ 8/XI-16/XI VI 同 3 .. 17/XI-23/XI 4 .. 24/XI-10/XII VII 同 5 .. 11/XII-28/XII 休暇 1 週間 VIII 同 8.5 5/I→現在 四月二日)</p> <p>檢者一田澤、柴田、三神、太田、川上、枝廣)</p>
--	--

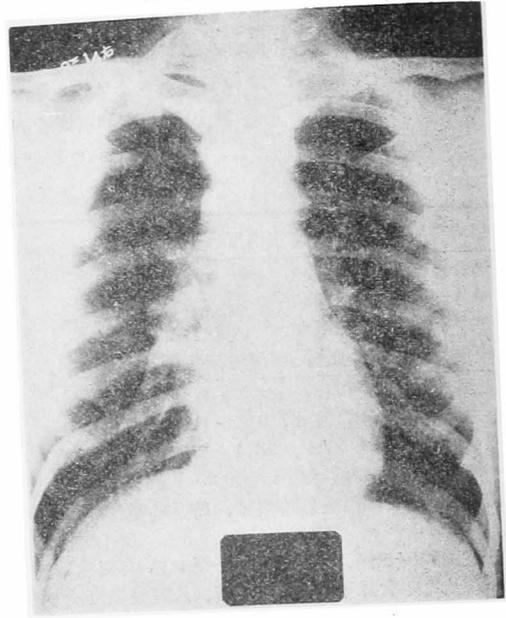
第 2 例 講習生 23 歳 女 體格普通

<p>14 年 1/V 採用、「ツ」皮内反(+) 2 年前濕性肋膜炎及肺炎「カタル」</p> <p>毎日一檢温(腋窩及直腸) 檢脈 毎月一體重 毎 2 ヶ月一赤沈、補結、「レ」線寫眞、診察 時々一血壓、血球像、肺活量</p> <p>發熱-15 年 11/I-16/I 採用時ヨリ 37.4 位ノ微熱アリ 後多クハ 37.0 迄トナリシガ上記發熱期間中ニハ 38.1 モ 2 回アリ 風邪氣味ニテ惡寒咽喉痛アリ 「レ」線 13/I 左肺中野ニ浸潤現ハル 12/III 殆ド消退シテ微カニ認メラルルノミ 赤沈 1 時間値-14 年 1/V¹⁰、8/XI¹⁰、15 年 15/I²²、7/III⁴ 補結:-14 年 1/V(++)、其後毎(-) 體重:-每常採用時ト略ク同シ</p>	<p>勤務及生活通常</p> <p>IX 度 (夜勤ダケ休み) ぞうきん棒等ノカ仕事モ廢セズ 勤務 11 時間 (全勤者ハ夜勤、講習ヲ加ヘテ平均 12.5 時間)</p> <p>参考:-X 度ハ勤務ハ普通ニテ外出禁止等歸寮後ノ靜養ニ努メシムルモノニテ IX 度ノ者ハ無論之ヲ守ル</p> <p>(檢者一田澤、柴田、三神、太田、川上、枝廣)</p>
--	---

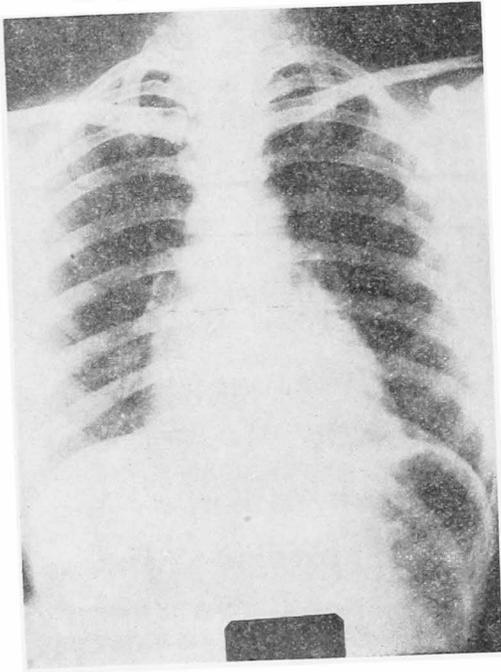
第1圖(第10表第1例14年8/VII)



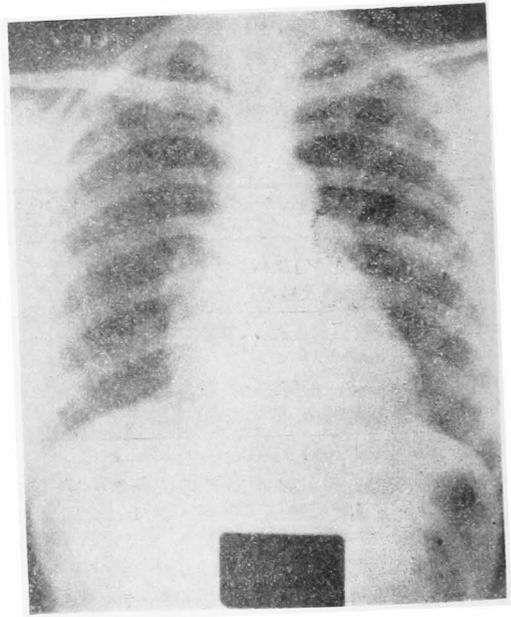
第2圖(第1例28/VIII)



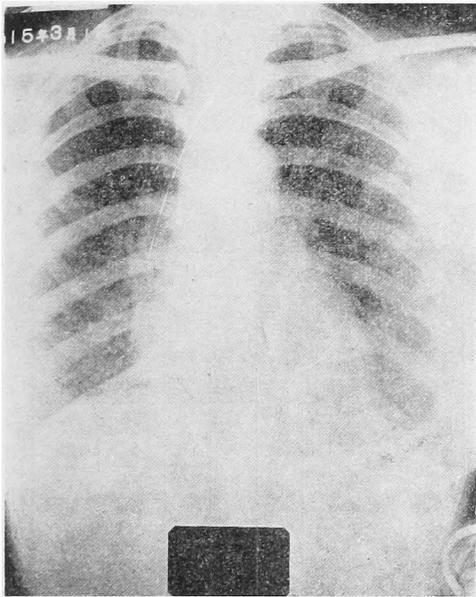
第3圖(第10表第2例14年16/XI)



第4圖(第2例15年13/I)



第 5 圖(第 2 例 15 年 12/Ⅲ)



ヨリ見ルニ、例ヘバ「自然治癒」ト云ヘバ修復の治療ノミヲ考ヘテ居ル者ニハ、醫師ノ力ヲ要セザル範圍ノ如クニモ聞コエテ、ソレ以上ノ醫術の迫及ハ困難ナル如ク感セラレル場合ニモ、豫防的治療トシテハ、周圍ヘノ病竈擴大ヤ病勢増進ヲ防グ爲メ種々ナル豫防的ノ指導方法ガ考ヘラレテ來ル、又治療項目ノ方カラ云フト、例ヘバ安靜休養ヤ人工氣胸應用ガ豫防的ノ意味ヲ有スルコトハ勿論デアルガ、鎮咳祛痰等モ單純ニ對症療法トシテ輕ク見ルコトハ出來ナクナツテ來ル。(3) (B) (ハ) 人結核症ノ豫防的治療ノ條下參照。

(イ) 實行方法ニ就テ

所謂要注意者、要監察者等ニ對スル發病豫防又ハ恢復者ノ再發豫防等ノ場合ノ實行方法ハ定期健康診査ノ時期表ト仕事程度表トニ依ツテ適當ナ組合セヲナシ、之ニ加ヘテ結核症ノ一般療法諸項目ノ精神ヲ適切ナル度合ニ應用シテ行クコトニナルベキデアルガ、第 10 表第 1 例(第 1 圖第 2 圖)及第 2 例(第 3 圖、第 4 圖、第 5 圖)ハ之レニ依テ效果ヲ擧ゲタ實例デアル。

豫防的治療又ハ治療的豫防ハ今尚ホ學術的準備ノ空虛ヲ感ゼシメラレル點ノ多イ領域デアルガ、所謂要注意者、要監察者等ニ對スル行ハレ

易キ處理方法ノ研究ハ目下ノ緊急問題デアルカラ、尙ホ 1, 2 自分トシテ將來ノ研究ノ基礎ト考ヘル方面ヲ左ニ掲ゲテ見ヤウ。

「肺結核ノ一般療法諸項目ノ内ヨリ」大正 15 年ノ本總會ニ於テ述ベタル「肺結核ノ一般療法」(結核第 4 卷第 7, 8 號)ヨリ 1, 2 ノ事項ヲ拾ヒ、之レヲ基礎トシテ、其後ノ補足ヲ追記スルト左ノヤウナ見解ヲ生ジテ來ル。

(A) 精神感動ノ影響、精神療法、職業療法 肺結核ノ症狀ニ對シテ精神感動ガ顯著ナ影響ヲ及ボスコトヲ示ス爲メー上記報告ニ掲ゲタルーツノ調査成績ヲ擧ゲテ見ルト左表ノ通りデアル。

第 11 表 精神感動影響調査表

調査事項	調査區別	悲喜怒後				
		悲哀心ノ後	喜ビノ後	怒ノ後	精神的仕事ノ後	談話ノ後
食慾	不振	133	29	47	38	26
	亢進	5	79	8	24	31
咯血血痰	出ル	22	6	8	7	5
	増ス	4	4	3	2	10
體溫	止ム		2		1	
	上ル	123	55	71	85	92
其他候ノ	下ル	5	18	6	4	4
	良又ハ無障礙	7	69	1	20	34
	不良	124	34	58	71	65

1 月 150 人、2 月 249 人(都合 399 人 1 ヶ月)ニ就テノ調査總計

此ノ表ノ成績ハ安靜療法ヲ原則トスル肺結核トシテハ當然ノ事デアルガ、其後ノ經驗ニ於テモ仕事ニ意外ニ堪エル者アル事實等ニ照シテ考ヘルト、精神ノ働キノ内デモ、感情的ノ興奮ガ特ニ大キナ影響ヲ與ヘルト云フ事ガ著目サレル、而シテ之ハ生理的ノ所見トシテモ、人間ノ腦ノ働キノ最モ敏感ニ身體徵候ニ現ハレルノハ、感情的ノ問題デアルコトト一致スルヤウニ考ヘラレル、此ノ生理的ノ所見ノ例トシテハ顔色分泌機能内臟運動等ニ對スル精神ノ影響ノ如キ、茲ニ一々列擧スルマデモナイガ、要スルニ植物性神經系機能ニ關スル現象デアルコトヲ茲ニ注目シ、精神療法ノ效果モ亦植物性神經系機能ヲ介シテ説明スレバ理解シ易イコトヲ述ベテ置ク。

精神療法ハ無駄ノ精力消費ヲ節約セシメ、治療的ニモ豫防的ニモ其ノ效果ノ大ナルコトハ明カデ、豫防的治療トシテモ、治療的豫防トシテモ共ニ重要ナ根本問題デアル。唯精神療法トシテ不純ナ説ヲ以テ、人ヲ惑ハス者ガ横行シ勝チデ、其爲メ嫌忌セラレルノデアルガ、ソレアルガ爲メ、精神療法ソノモノガ輕ンゼラレテハナラナイ、今茲ニハ精神療法其モノノ技術方法ニ就テ多く述ベルノデハナイガ、豫防的治療トイフ語ガ精神療法ノ技術方法トシテモ最モ適切ナ考ヘ方デアルコトヲ一言シテ置キタイ。凡テ感情ノ興奮ハ發シタルヲ鎮メルヨリハ、未發ニ防止スル方ガ遙一容易デアルガ、殊ニ狭イ「ベット」ノ上ダケヲ身ノ置キ場トシテ靜臥スル患者ニ於テハ、一旦感情ノ興奮ガ起レバ、之レガ鎮靜ハ自由ニ歩キ廻リ得ル者ニ比シテ如何ニ困難ナルベキカヲ想像スルトキ、ソレヲ未發ニ防止スルコトノ意義ノ如何ニ大ナルカハ自明ノ理デアル、故ニ平素ノ注意及修養ト精神感動ノ前兆時期ニ於ケル警戒轉換トハ最モ效果的デアル。

東京市療養所ノ患者治癒率及死亡率ニ於テハ今迄度々ノ調査ニ何時モ宗教ノ信仰アル者ガ、ソレノ無イ者ヨリ成績ガ良イトイフ狀況ヲ示シテ居ル、東京市療養所ニハ重症患者ガ多く入り來ルノデ、此所ノ死亡率ハ餘リ大ナル差ハ呈シナイガ、ソレデモ度々ノ調査デ何時モサウナツテ居ルコトハ、一定ノ眞理ヲ示スモノト見ルコトガ出來ヤウ、其他個々ノ事例ニ於テハ宗教心ノ裨益シタ成績ハ多く見ル所デアル。教育程度モ亦一定ノ關係ヲ有スル(368頁表)。

肺結核患者ヲ長ク扱フ者ハ誰モ精神作用ノ影響ノ大ナルヲ認メナイ者ハナカラウ、之ニ就テ多く述ベルノ要ハナイガ、前章ニ述ベタ關係上一寸再説シテオキタイコトハ、職業療法作業療法ニ於テモ第一ニハ精神療法トシテ大ナル意義ガ認メラレ、其中心點ハ患者ヲシテ人生ヘノ希望ヲ失ハシメナイ所ニ存スルトイフコトデアル。絶望的ニ感ジルト、人ハ誰モ種々ナ悲觀、焦躁、興奮ガ起リ易イカラデアル、良性ノ病竈ヲ

有シテ自ラ知ラズニ居ル者ニ意外ニ經過ノ良イ者アル一面ノ理由モ茲ニ在ルコトガ察セラレル。

(B)開放寒冷療法ノ效果、月別結核死亡率

前記ノ一般療法報告ニ於テハ、嘗テ東京市療養所ニ於テ冬季大氣療法ヲ最高度ニ勵行シター團

第12表 冬季開放療法患者咯痰總量

曆日	12月		1月		2月		3月	
	1組	2組	1組	2組	1組	2組	1組	2組
1		159		38	113	25	90	
2		167		41	80	40	56	
3		144		113	102	28 ×	72	
4		113		41	37	44	38	
5		123		65	101	34 ×	77	
6		110		119	102	64	66	
7		122		78	101	62 **	90	
8		94		36	40	31 ×	34	
9		91		32	52	114 **	74	
10		102		40	64	47 ×	50	
11		72		70	68	116 **	61	
12		90		46	89	59 ×	90	
13		71		38	62	37 ×	44	
14		87		35	47	25	59	
15		117		50	24	36	29	
16		53	128	83	103	47	84	
17	245	54	124	36	81	39	67	
18	270	97	127	83	52	64 ×	56	
19	213	50	43	64	83	35 **	81	
20	137	71	50	35	87	49	79	
21	209	51	71	48	77			
22	187	94	104	76	110			
23	187	93	94	73	53			
24	146	62	102	49	47			
25	126	54	73	34	75			
26	145	102	117	44	41			
27	139	35	52	34	37			
28	143	67	69	84	99			
29	104	25	82					
30	151	50	82					
31	135	36	71					

×印ハ風強キ日、**ハ最モ甚シク砂塵濛々窓ヲ閉ズ

ノ患者ニ於テ、肺結核症經過ノ極メテ良好デアツタ事實ヲ詳述シテアルガ(寺尾殿治氏ト共述、結核第 4 卷第 5 號)前頁ノ表ハ其ノ所見ノ一ツデ、此ノ寒季開放療法施行中喀痰量ノ漸次減少シタル狀況ヲ示シタモノデアアル。

又寒冷ノ治療ノ效果ニ就テハ、其際モ冬季ニハ夏季ヨリ死亡率ガ少ク、諸症状モ良好デアアルコトヲ表示シ、寒季殊ニ 1、2 月頃ノ疾病經過又ハソレノ後來ニ及ボス影響ハ良好デ、夏季ノ疾病經過又ハソレノ後來ニ及ボス影響ハ不良デアルト述ベテ置イタガ、其成績ハ其後モ東京市療養所ニ於テ何度モ調査シタモノガ皆同様デアアル、ソノ調査成績ノ 1、2 ヲ例示スレバ左ノ通りデアアル。

前記報告ニ掲ゲタ表ト同様ノ表ヲ、昭和 5 年ニ再ビ作成シ、大正 10 年以來ノ 7 ケ年間ニ就テ各年ノ月別死亡率ヲ列舉シテ見タトキモ、大體前回ト同一デ、最高死亡率ヲ示ス月ヲ各年 2、3 宛選ンデ見ルト、上記 7 年間ノ中一、7 月ガ 5 回、8 月、10 月ガ各 4 回、12、11、5、4、3 月ガ各 1 回デ 1、2、9 月一ハ 1 回モナカツタ、又最低率ヲ示ス月 2、3 宛ヲ選ブト 2 月ガ 5 回、3 月、11 月、12 月ガ各 3 回、1 月、4 月ガ各 2 回、9 月ガ 1 回デアツテ、5、6、7、8、10 月ニハ 1 回

モナカツタ、7 ケ年ノ各月ノ率ヲ合計シ、7 分シテ、平均シタ所デハ、最高率ハ 10、7、8 ノ 3 月デ略々同率デアリ、最低率デハ 2 月ガ特ニ少ク、次デ 1、3、4、11 月ガ略々同率デアツタ(368 頁附表参照)(結核第 8 卷第 5 號演說参照)。

昭和 6 年迄ノ 11 年間平均ノ月別死亡率ヲ見タ時モ第 13 表ノ通り、ヤハリ夏季ニ死亡者ガ多カツタ(7 年以後ハ有料モアリテ複雑、東京市療養所年報参照)。

死亡者バカリデナク、患者數モ夏季ニ多クナイカノ調査トシテ、東京市療養所ノ入所申込數ノ統計ヲトツテ見タ事ガアル、ソレハ創立以來 5 ケ年間ニ於ケル各月ノ申込數ヲ月別ニ總計シタモノデアツタガ、9、6、8、10、4、5、7、11、3、2、12、1 月ノ順デアツタ、入所申込ミニハ種々ナ事情モアラウカラ、必ズシモ患者數ノ實情ヲ示ストモ云ヘナカラウガ、兎ニ角夏季ニハ申込數ガ多く、冬季ニハ少ナカツタ。

寒冷開放療法ノ效果ノ大ナルコト及ビ寒冷季節ニ經過ノ良好ナルコトニ就テハ前記ノ一般療法宿題報告ニ於テ寒冷刺戟ノ脈管運動神經ニ對スル作用ニ歸セラルベキコトヲ述べ、植物性神經系機能トノ關係ヲ詳述シテ置イタ、其後又「テラピー」(昭和 2 年 11 月號)一モ「寒冷療法」ト題シテ説明シタ事モアルガ、何レモ主トシテ感冒ニ對スル抵抗力ヲ高メルトイフ意味、身體殊ニ皮膚、氣道粘膜等ノ鍛鍊トイフ意味ニ於テ治療ノ豫防又ハ豫防的治療ノ重要ナ一項目トナルベキコトヲ述べタノデアアル、即チ脈管運動神經乃至一般植物性神經系機能ニ對スル作用ヲ中心トスル考ヘデアツテ、此點モ亦今茲ニ特ニ注目シテ置キタイ。冷水摩擦ナドト同様ノ考ヘ方デアアル。

(C)「ヴィタミン」B 問題、脚氣トノ比較、血壓
結核症ノ發病經過ニ對シテ「ヴィタミン」B 缺乏ガ何等カノ原因ノ關係ヲ有スルナキヤノ問題ハ我邦ノ結核豫防事業トシテハ是非一應ノ研究ヲ遂ゲザル可ラザル所デ既ニ其密接關係ニ就テノ報告モ發表サレテ居ル、此問題ノ解決ニハ先以テ、肺結核患者中ニ脚氣症狀ヲ有スル者ガ多數

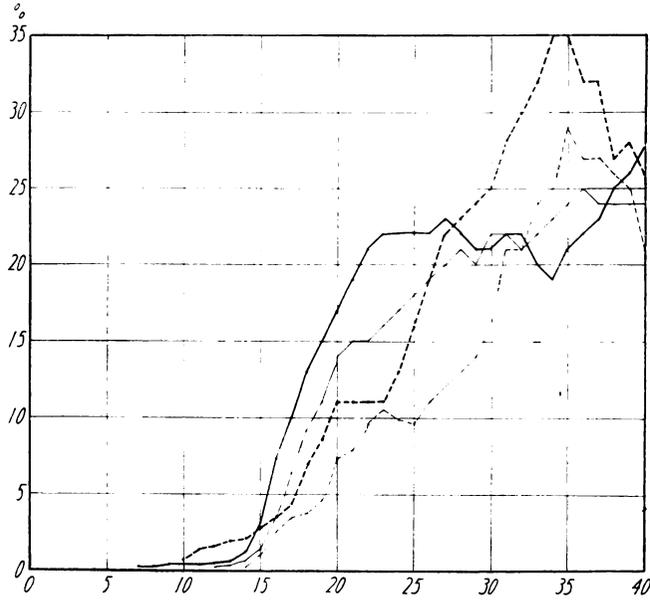
第 13 表 最初 11 年間ノ月別死亡率平均
(對月別在所者數)

月次	甲		乙	
	各年死亡率ノ平均	順位	11 年間ノ總數ニ於ケル率	順位
1	8.4	5	8.0	6
2	7.5	8	7.1	8
3	8.2	7	7.9	7
4	8.3	6	7.9	7
5	8.7	4	8.2	4
6	8.3	6	7.9	7
7	9.2	2	8.7	2
8	9.0	3	8.6	3
9	8.4	5	8.0	6
10	9.5	1	9.2	1
11	8.3	6	8.1	5
12	8.3	6	8.0	6

第14表 各年齢ニ於ケル脚氣既往症百分率

—— 健康男子 健康女子
 —— 肺結核男子 肺結核女子

(40歳以上ハ人員少キ爲メ百分率トシテハ適セズ故ニ省略ス)



健康男子	年 齡	12	15	20	25	30	35	40		
	當該年齢迄＝脚氣既往症ヲ有シタル人員數	1	10	84	91	81	68	49		
	當該年齢ヲ經過シタル全人員	745	745	598	505	374	278	205		
	百分率	0.13	1.3	14	18	22	24	24		
健康女子	年 齡	14	15	17	20	25	30	33	35	40
	當該年齢迄＝脚氣既往症ヲ有シタル人員數	1	4	12	20	13	12	10	8	3
	當該年齢ヲ經過シタル全人員	389	387	350	273	136	74	42	28	14
	百分率	0.26	1.0	3.4	7.3	9.6	16	24	29	21
肺結核男子	年 齡	7	10	14	15	20	25	30	35	40
	當該年齢迄＝脚氣既往症ヲ有シタル人員數	1	2	10	23	109	99	57	32	22
	當該年齢ヲ經過シタル全人員	748	743	742	736	635	446	271	151	80
	百分率	0.13	0.27	1.3	3.1	17	22	21	21	28
肺結核女子	年 齡	10	15	20	25	30	35	39	40	
	當該年齢迄＝脚氣既往症ヲ有シタル人員數	3	11	35	38	33	26	11	9	
	當該年齢ヲ經過シタル全人員	400	387	332	232	132	74	40	34	
	百分率	0.75	2.8	11	16	25	35	28	26	

ニ存スルコトナキヤノ調査ハ有力ナル根據ヲ與フルモノト考ヘラレル、此ノ目的ニテ前記大正15年ノ肺結核一般療法ノ報告ニ當リ、東京市療養所ノ患者ニ就テ、之レヲ調べタコトガアツタガ、確カナ脚氣症ヲ有スル患者ハ特ニ多イトイフ如キ成績ガ得ラレナカツタ、當時又「ビタミン」B缺乏ノ兎ニ就テ特ニ結核症ニ罹リ易イトイフ如キ成績ノ得ラレザルヤヲ檢シタコトガアツタガ、ソレモ明カナ陽性成績ハ呈シナカツタ(動物數ガ少ナカツタノデ再檢ヲ要スルガ)、ソレデ該報告ニ於テハ自分ノ得タ所見ヨリ理論的ニ、「ビタミン」B缺乏ガアレバ、結核症ノ經過ニ對シテ甚ダ不利ナルベキ理由ヲ列舉説明シ置クニ止メタ。依ツテ昨年10月再ビ肺結核患者ニ於ケル脚氣症ヲ所有者ノ數ヲ調査シタ所、今回モ亦同様ノ成績デアツタ、即チ在所患者數1170名ニテ、其内ニ著明ナル脚氣症ヲ呈スル者ハ殆ド見當ラズ、「シビレ」、運動麻痺等ニ就テハ輕度ナル者6(又ハ7)名アリタルノミニテ、其他ニハ一層疑ハシキ(脚氣ラシクナキ)訴ヘモ全部デ7名アリタルニ過ギナカツタ。

但シ東京市療養所ニテハ七分搗胚芽米ヲ用ヒテ居ル、之レハ胚芽米搗精用アラザル清水式無砂搗精米機ヲ用ヒ、60—70%又ハソレ以上ノ胚芽ノ保タレルヤウニ運轉スルノデ、七分搗ニ止メザレバ、胚芽米粒ノ%ガ著シク減ズル故、結局七分搗胚芽米トナルモノデ、「ビタミン」Bヲ考ヘテノ搗精法トシテハ丁度之レガ適切デアルト考ヘラレル。

次ニハ肺結核患者ニハ其ノ既往症ニ於テ脚氣症ヲ有スル者多クナキヤモ重要ナ問題デアル。依ツテ東京市療養所ノ肺結核患者ニ就テノ調査成績ト、諸集團ノ健康者ニ於ケル調査成績トヲ男女別及年齢別ニ就テ比較觀察シタ所、脚氣既往症アル者ハ療養所ノ患者、殊ニ年若キ患者ニ稍々多イ、但シ此ノ調査上特ニ顧ミラルベク豫期セシ諸事項ヲ考慮ニ入レルト大差ハナイトイヘル成績デアツタ(第14表)。此際婦人ニテハ肺結核患者ニモ健康者ニモ産後ニ脚氣ヲ發シタトイフ者ガ著シク多カツタコト等ヲ參酌シ、尙多數例ニ就テ再調査ヲ考ヘテ居ル。

其他自分トシテハ平素肺結核患者ノ診察ニ當ツテハ脚氣症ヲ有無ニ就キ多年注意シテ觀察シ來ツタノデアルガ、少クトモ動物性神經系ニ於テハ脚氣ニ類似シタ症狀ハ殆ンド見ラレナイノガ常デアル。然ルニ植物性神經系ニ於テハ相似タル症狀が見ラレル、殊ニ血壓ノ下降ガ類似シタ點デアル、血壓ハ兩疾患ニ於テ共ニ下降スル、自分ハ從來ノ記載ヲ見テ、肺結核ノ血壓下降ニ就テハ熱ノ高イモノ、重症ノ者程著明ト云ハレル語デ常識的ニ當然ノ現象トモ思ハレルヤウナ氣ガシテ來テ居タノデ、今回東京市療養所ノ各病舎ノ受持醫ノ協力ニ依ツテ、熱無ク榮養狀態モ可、赤沈モ著シク多クハナク、病竈所見モ餘リ高度ナラヌ者ヲ選ビ、又他ノ外來患者ニテナルベク新シキ病竈ノ所有者トイフヤウナ者ヲ捉ヘテ血壓ヲ計ツタ處、ソレノ低キ者ガ比較的ニ多キコトヲ見タ。最大最小血壓共ニサウデアツタ、依ツテ之レニ糖「エキス」治療ヲ試ミタルニ、ソレニ依ツテ急ニ上昇スルヤウナ所見ハ得ラレナイ者ガ多カツタ、ソシテ長期ノ間ニ結核症狀ノ輕快ニ伴ツテ漸次ニ上昇スル者ガ多カツタ、其他ノ症狀トシテハ股動脈音ハ時々陽性デアルガ、脚氣程著明ニハ聽カレナイ、(肺動脈第二音ガ肺結核ニ於テ多少強盛トナルコトモ知ラレテ居ルガ、之モ脚氣程デハナイ、)皮膚ニ毛細管怒張ノ見ラレルコトナドモ血管弛緩ヲ窺ハシメル症狀ト見ラレル、其他又胃液分泌等ノ變化モ相類似シテ居ル。是等ノ諸所見ヲ綜括スルト、大體ニ於テ、肺結核デハ、植物性神經系ガ脚氣ト似タ方向ヘ冒カサレルモノト云ヒ得ルコトヲ考ヘル。從ツテコノ兩疾患ガ合併スレバ不利ナルコトハ明カナル故、肺結核治療ニ當リ、我邦デハ「ビタミン」B₁ノ不足ナキヤト一應考慮スルコトハ肝要デアル。

以上(A)(B)(C)ノ各條下ニ掲ゲタル諸事項ハ肺結核症ニ於テ植物性神經系機能ノ冒サレル狀況ノ一端ヲ示スモノト見ルコトガ出來ル。

(ロ)人間ノ植物性神經系機能ニ就テ(植物性神經系及ビ其ノ效果器官ノ機能竝ニ之レト甄別シ

得ザル「ホルモン」作用、「イオン」作用等ヲ總括シテ)

「人間ノ植物性神経系機能ハ動物ナドニテハ到底比較ニモナラヌ程精緻敏感ナモノデ、人間ノ植物性神経系機能ニ關スル實驗ヲ動物ニ於テ行フ如キハ無意味ナリト考ヘシメラレル場合モアル程ニ、大ナル相違ヲ有スルモノト考ヘラレ、加之又病原ニ對スル敏感度ハ個人個人ノ個體ニ依ツテ著シキ差違ヲ示スモノト考ヘラレル」トカウイフ推定ヲ以ツテ茲ニ考ヘテ進メテ行ク。此推定ノ起リハ脚氣ノ研究カラ來タノデアル、嘗テ脚氣ノ原因豫防及治療ノ研究ニ當ツテ、中心問題トナツタモノハエイクマン氏ノ白米飼養ノ鳥類疾患デアツテ、之レハ大體ニ言ヘバ脚氣ガ白米食國民ニ來ルト云フ流行病學的觀察ト鳥類ノ白米飼養疾患ニ麻痺症狀ガ來ルト云フ二ツノ點カラ、一概ニ同一疾患視サレタ如クデアツタ。外國デハ多數ノ報告ガ出タガ、日本デモ當時之レヲ同一視シテ居タ人が2,3アツタ、ソノ動物疾患ハ糖又ハソノ製劑一依ツテ忽チ快癒シタ、ソレデ人間ノ脚氣ニモ糠製劑ガ有效ダトセラレタ、此状態ニ在ツタ時、私ハ林春雄教授指導ノ下ニ白米飼養ノ動物實驗ヲ行ツテ、其ノ所見ノ脚氣ト大ニ相違スルコトヲ指摘シ、之ヲ同一疾患ト見做サン一ハ少クモ先以テ其相違スル所以ヲ説明スルコトガ必要ダトシタ、當時又人間ノ脚氣ニ糠「エキス」ヲ與ヘタ例ニ於テハ明カナ變化ヲ認メ得ナカツタ。ソレデ其ノ事實ヲ發表シテ該動物疾患ヲ白米病ト呼ビ、比較ノ決定マデハ別名ヲ附シオクガ當然ダト考ヘタ、然ルニ其後獨逸留學中、シャウマン氏ノ記載ノ中ニ、動物ノ白米飼養疾患ニ對スル糠ノ有效成分ハ「アルコール」ヨリ遙ニ能ク水ニ溶解スルトアルヲ見テ、吾々ノ日本デ使ツタモノハ、自製品モ亦、販賣藥品モ皆「アルコールエキス」デアツタ事ヲ想ヒ起シ、歸朝後再ビ入澤内科ニ入り、糠ヲ水デ煮沸浸出シタル液ヲ用ヒテ試驗シタ、自分ガ陸軍省ノ臨時脚氣病調査會臨時委員デアツタ關係デ、ソコノ診療所デ特ニ循環器症狀ノ著明ナ

脚氣患者ヲ選ビ、ソレノ多數ヲ入澤内科教室ニ送り、自製ノ水製糠「エキス」ノ大量ヲ與ヘ、教授及教室員諸君ト共ニ精細ニ觀察シタ、ソノ時初メテ極メテ顯著ナル效果ヲ見ルヲ得タ、即チ内服後2,3日目ヨリ尿量増加、脈搏數減少、自覺症狀ノ輕快、心臟其他循環器症狀ノ急速ナル恢復等ガ全く紛フ方ナク鮮ヤカニ現ハレルヲ見、豫防試驗ニ於テモ亦の確ナ成績ヲ得タルヲ以テ、最モ顯著ナル特效藥トシタ、前ニ用ヒタノハ「アルコールエキス」デアリ、後ニ用ヒタノハ自製ノ水製「エキス」デアツタガ、今日「ビタミン」Bガ水溶性「ビタミン」デ通リキリニナツタ世ニ至ツテ、之レヲ顧ミレバ何ノ不思議モナイ當然ノ經路デアツタト考ヘラレル。

却說糠「エキス」ガ脚氣ニ對シテ有效トナルト動物ノ白米病ト脚氣トノ所見ノ相違ハドウ解スベキ乎、白米病デ重症ナモノハ、羸瘦衰弱餓死ニ等シキ状態ヲ以テ斃死シ、末期ニ神經麻痺又ハ痙攣様症狀ヲ呈スルノニ、脚氣ノ重症ナルモノハ強壯ナル男子ガ急ニ衝心ノ苦悶ヲ訴ヘ、號泣輾轉反側少時間ノ後ニハ已ニ死亡ス、尙又糠「エキス」ノ作用仕方モ白米病ニテハ注射後2,3時間ニテ痙攣去リ麻痺ニテ斃レタルモノガ歩キ出ス等神經症狀ノ急速ナル恢復ニ依リ、強度ナル神經藥ノ如クニ作用シ、人間ノ脚氣ニ於テハ強度ノ強心劑ノ如クニ作用シテ其所見モ餘リニ相違シテ居ル、斯カル相違ハ何ニ依ツテ來ルベキ乎。自分ハ當時之レニ關シテ脚氣ノ原因ニXナル原因ノ事項ヲ想定シテ説明スル外ナシト考ヘタ。即チ脚氣ハ輕度ナル「ビタミン」缺乏(第15表ノ白米嫌忌症狀又ハ羸瘦衰弱等ハ未ダ現ハレザル如キ輕度ナルモノ)ニXナル不明ノ原因ガ加ハツテ其ノ症狀ヲ現ハシ來ルモノトイフ意味デアツテ該表ヲ以テ説明シタ(東京醫學會雜誌、大正8年第23號、日本病理學會々誌、大正10年第11卷、醫學中央雜誌、大正11年第368號)

其後「ビタミン」ハA, Bニ分レ、Bハ更ニB₁, B₂…等ニ分レタルヲ以テ、「所謂輕度ナル缺乏」トイフ意味ハ其B₁ダケノ缺乏ト見レバ、ソ

第 15 表 脚氣ト白米病トノ比較

鳥類ノ白米病		脚 氣 症 狀	
急性重症ノ糠成分缺乏症	比較的輕度ノ糠成分缺乏	+	X
白米嫌忌(白米以外ノモノニ對シテハ饑餓的食思亢進)	無	シ	無
羸 瘦	殆ソドナシ		殆ソド無
神經機能性症狀變性	---		—
	—		有り著明
心臟症狀著明ナラズ	著明ナラザルベシ		有り著明

レニテ解セラルベク、醫事衛生昭和 12 年 7 月 21 日號(入澤先生ト共述)一ハ此點ヲ述ベタガ併シ尙 X ナル原因の事項ハ依然必要トシテ置イタ。然ルニ其後未ダ此ノ X ナル原因の事項ハ見當ラザル故、今之レニ就テ「人間ノ植物性神經系機能ガ前掲推定論ノ如ク動物ト違ツタ敏感度ヲ有スル事」之レ即チ X ト解スレバ脚氣ニ於テハ「ヴィタミン」B₁ 缺乏ニ依リ、未ダ榮養等ノ明カニ冒サレザル間ニ、已ニ植物性神經系ガ敏感ニ感應シ來ルモノト見ルコトヲ得ベク、之レニ依ツテ脚氣原因ノ難問題モ忽チ明瞭トナルモノト考ヘラレル。

ソコデ他方面ニ於テ之レガ例證トナルベキ事實ナキヤヲ考ヘルト、自分が常々問題トシテ居ル事項トシテハ「アドレナリン」ノ致死量ニ就テ、人間ハ動物ヨリ遙ニ敏感ト考ヘラレル事ナドガ其例トナツテ來ル。

尙一ツ例ヲ舉ゲルト 10 餘年前ノ事デアツタガ、自分ハ嘗テ電車ヤ「バス」ノ中デ坐禪ノ氣持チデ坐ツテ居テ、精神集中ニ多大ノ努力ヲスルト、ソレニ依リ脈搏ノ結代ガ起リ、ソレガ自分ノ感ジデ分ル、ソレデ診斷ノ爲メニ特ニヤツテ見ルト、何度ヤツテモソレガ起リ、詰リ意識的ニ脈搏結代ヲ起シ得ラレルコトヲ體驗シ、之レヲ迷走神經緊張(ワゴトニー)ト解シタ、ソレ以來ハ自然ニ起リサウナ時ニハ映畫デモ見タリシテ、氣ヲ紛ラスニ努メ、バツバツト輕ク腦ヲ使ツテ集中シナイヤウニシテ居ル中ニ、何時トハナシ

一、氣付カヌ間ニ治ツテ行ツタ。此ノ事實ヲ回想シ、精神ノ影響ニ依ル人間ノ植物性神經系ノ働キハ、全ク動物ナドニ就テ想像モシ得ザル現象ヲ起スコトガアルト考ヘル。

斯カル個々ノ事例ハ上掲ノ推定原理ノ證明トシテ引用シタモノデアルガ、ソコデ此ノ原理ハ常識上ドウカトイフニ、諸種ノ藝術、美術其他ノ巧緻運動等ニ於テ、人間ノ運動神經ガ、アレ程精細微妙ニ腦ノ働キニ應ジテ動く敏感度ヲ考ヘルト、人間ノ感情ト密接不可分ノ植物性神經系機能ハ一層敏感ニ反應スベキコトハ當然ノ事ト考ヘラレル。個々ノ官能トシテハ動物ニモ例ヘバ犬ノ嗅覺トイフ如ク人間ニモ優ツタ點モアルガ、一般トシテハ人間ト動物ノ間ニハ精神ノ働キノ差異ニ比例スル丈ケノ相違ガ、動物性神經系機能ヤ植物性神經系機能ノ間ニモ存在シテ然ルベキコトダト考ヘラレル、今日ノ實驗醫學ガ動物實驗ヲ基礎ニ置イテ居ル以上、此點ハ十分明カニシテ置カネバナラナク、又精神療法其他體育、鍛鍊等ノ實行ニ當ツテモ十分顧ミネバナライ所デアル。

以上ハ「ヴィタミン」B₁ノ缺乏ニヨリ人間ノ植物性神經系ハ極メテ敏感ニ冒サレ、爲メニ動物ノ白米病ニハ全ク見ラザル如キ症狀ヲ呈スルモノト解釋シテ、脚氣ト白米病ノ相違ヲ説明セントスル爲メノ推定論デアルガ、脚氣ノミニ就テ考ヘ居リタル間ハ、餘リ便宜主義ノ勝手ナ説明トナランコトヲ恐レテ居タ。然ルニ今結核研究ノ上ニ於テモ亦同様ノ推定ニ到ツタノデ、相俟ツテ茲ニ所見ヲ述ベテ見ルコトニシタノデアル。

人間ノ結核ニ於テハ前條ニ述べタルガ如ク、植物性神經系ヨリノ影響極メテ顯著ニテ、大正 15 年ノ本總會ニ於テモ稍々詳細ニ説明シテ置イタガ、其後ノ研究ニ於テハ一層ニ之レヲ重視スルヤウニナリ、遂ニ上掲ノ如ク解スルトキハ結核ノ動物實驗成績ガ人間ト相違スル點ノ説明ニモ、亦人間ノ個人個人ニ依リ結核症ノ消長ガ甚ダシク相違スルコトノ説明一モ各種ノ場合ニ理

解シ易クナルモノト考ヘル(次項(ハ)ノ條下參照)尙結核ト脚氣トヲ斯ク相竝ベテ考察スルト、脚氣原因ノ説明ニ於テ、常ニ問題トシ來リタル「夏季ニ症状著明ナル患者ノ多キ理由」ハ結核症ノ經過ガ夏季ニ不良ナルコト及ビ次項ニ述ブル鼻炎ノ例ナドカラ之亦説明ガ容易トナル。

(ハ)人結核症ノ豫防的治療ニ就テ

肺結核ノ發見治療及豫防上ニハ、喀痰ノ問題ハ固ヨリ重要デアルガ、豫防的治療トシテハ更ニ進シテ開放性肺結核患者ノ喀痰ヲ減少セシメタリ、喀痰ヲ氣道内等ニ於テ滅菌シテ腔内傳染ヲ豫防シタリスル工夫ニ研究ノ重點ヲ置キタイ。大正15年ニ本總會ニ於テ(結核第4卷第7、8號)豫防的治療ノ考ヘノ一説明トシテ、病竈ノ擴大ヲサヘ豫防シテ居ルコトガ出來レバ、舊病竈ハ自然ニ治癒シ行クベキコトヲ治療ノ方針トシテ述べタ、其後又咳嗽、喀痰ニ對スル治療的處置モ、單純ナル對症療法デハナク、豫防的治療ノ見方ニ於テハ、一種ノ原因療法ニナリ得ルコトヲ述べタ(金原書店發行ノ「肺結核對症療法」又ハ治療藥報昨年1月號)等。人間ノ結核症ガランケ氏ノ2期デ止マラナクテ、肺結核トシテドコ迄モ蔓延シテ行クノハ喀痰ノ腔内傳染アルガ爲メデアルコトカラ推シテ、サウ考ヘザルヲ得ナイ(同様ニ尿等ニ依リ蔓延ニ就テモ亦、斯ク考ヘルコトガ出來ヤウ)、事實又統計的觀察ニ於テ非開放性肺結核ハ普ク知ラレタル如ク、開放性肺結核ニ比シテ遙ニ經過ガ良好デ吾々ノ今回ノ調査ニ於テモ、前ニ(2)(B)ニ於テ東京府立靜和園へ送ツタ患者ノ經過ノ良好ナルコトハ表デ示シタ通りデアル、此意味ニ於テハ喀痰中ノ結核菌検査ハ周圍ノ安全ノ爲ニ必要ナバカリデナク、本人ノ豫後ノ安全ノ爲メニモ必要デアル、斯クシテ喀痰ノ危險ガ減少スレバ周圍ノ人ニ對スル結核豫防ノ上ニモ效果ハ甚ダ大デアル、故ニ氣管内喀痰消毒ヲ理想的ニ行ヒ得ル藥劑ガ出來レバ結核治療及ビ豫防ハ最モ簡易化サレル筈デアル。

動物實驗ノ結核(人型菌結核)ニ滲出型ノ少キコ

ト及ビ喀痰ノ見難キコトモ、動物ノ結核ガ諸種ノ治療試驗、豫防試驗ニ於テ折々成功シ易ク、人間ノ肺結核ニ於テハ、ソレガ困難ナルノ差アル理由ノ一ツトスルコトガ出來ヤウ。

以上ハ人結核症ノ病竈擴大豫防ヲ目的トシタル豫防的治療トシテ今日述ベントスル要點デアルガ、更ニ豫防的治療ノ考ヘヲ以テ遡テ行クト、次ノ如キ關聯問題ガ起ツテ來ル。

動物ト人間ニ於ケル喀痰ノ有無及ビ病竈狀態ノ相違ニ就キテハ、人間ノ植物性神經系機能ノ敏感ナルコトヲ一原因トシテ見得ナイカ。

分泌ニ就テハ、少クトモ鼻粘膜デハ、精神狀態ニ依ツテ増減スルコトアルハ明カデ、ソレハ植物性神經系機能ノ關係ト見ル外ハナイ、氣管、氣管枝等ニ於テハドウカ。

鼻粘膜ノ分泌ニ就テハ、精神作用ノ影響ニ依ツテ非常ニ高マルモノデアルコトヲ、自分ハ2、3年來自分ノ身ニ於テ體驗シツ、アル處デアル、ソレハ耳鼻專門家カラハ神經性鼻炎ト診斷セラレテ居ルガ、好シテ夏季炎暑ノ候ニ精神疲勞ヲ感ズルトキニ發スル、ソレノ發現シ易キ狀態ニナルト、日常ノ回診位ノ精神作業デモ甚シク鼻汁流出、無據「マスク」ヲ用ヒテ回診スル外ナキコトモアル。噴嚏、鼻汁過多、稀ニ痒感、鼻閉塞等感冒ト全然同様ノ症状ガ起リ來ルノデアルガ、耳鼻科專門醫ハ鼻粘膜ニ何等他覺的變化ガ認メラズトシ、之レヲ神經性鼻炎ト稱シテ居ル、事實又勉強ノ疲レ、不眠ノ後等ニ特ニ多ク發シ、他ノ事ヲ精神ガ緊張シタリ興味アル事ニ紛レタリシテ居ル時ハ全ク起ラズシテ、後ニナツテ人ニ笑ハレルコトモアル程ニテ、精神的影響ヲ受ケルコトハ明カデアル、即チ粘膜分泌ガ少クモ鼻ニ於テハ精神作用如何ニ依ツテ亢進スルノ實證ト考ヘルノデアルガ、然レバ氣管、氣管枝ニ於テハ如何、蓋シ相似タル關係ノ存スル可能性ハアラウ。

病竈ノ發現ニ就テハ機能性病理學ガ「器質的疾患ニ就テモ身體ノ機能的變化續發スルコト」ヲ唱ヘ例ヘバ膽石ノ成因デハ膽道ノ植物性神經系支配障礙ノ結果運動障礙ト共ニ分泌異常ノ起ルガ主ナル原因ダト説明スル如キハ、豫防的治療ノ考ヘヨリ見テ最モ多ク興味ヲ感ズル所デアルガ、結核ニ於ケル治療ノ對象モ其ノ機能的前驅徵

候マデ進メテ行カレナイカ、病竈ノ浸潤ニ就テハ Pfaff, Herold 兩氏ハ其著 Grundlagen einer neuen Therapieforachung der Tuberkulose ニ於テ結核菌ヲ靜脈内ニ注射スルト病竈ノ出來ル場所デハ、先ヅ血行ガ遅クナリ(甚ダシケレバ、止マル)、ソレニ次デ浸潤ガ起ルト云ツテ居ルガ、此ノ血行ノ遅クナルコトハツノ機能的變化デハナキカ、之レハ上記ノ如キ前驅徵候トシテ見ラレナイカ、又青年ノ春機發動期ニ結核症ノ發シ易キコトヲ植物性神経系ノ「ラビール」ナルニ關聯セシメテ考ヘル説モアルガ、ソレモコ、ニ參考トナラナイカ。

又結核症ノ活動性症狀ニ就テモ、出來ル丈クソレノ發現ヲ豫防的ニ治療スル各個ノ着眼點ヲ發見シ得ナイカ。是等ノ問題ニ對シテ植物性神経系機能乃至精神作用ノ關係ヲ明カニセントスルコトハ、豫防的治療研究トシテハ最モ重要視スル所デアル。

(C) 唱道ノ由來、實施ノ經過及ビ現在ノ實行問題

茲ニ唱道トイフノハ社會ヘ向ツテ唱道シタコトノ意味デアル。

健康診査ノ聲ハ近來甚ダ旺ントナツタガ、實際有效ニ行ハレルノハ、今尙社會ノ一小部分ニ過ギナイ、今後ノ開拓上ノ參考ニモ自分ノ經驗ヲ述ベテ見ヤウ。

「サナトリウム」療法ノ始祖ブレイメル先生ハ結核菌發見前ノ事トテ當時ノ病理學説ニ從ヒ、「肺臟ノ大サノ割合ニ心臟ガ小ク血管ガ細イトイフヤウナ虛弱ナ體質ヲ有スル者ガ肺結核症ヲ發スルノダトイフ體質論カラ出發シ、戶外ニ於ケル適當ナル運動ニ依リ心臟鍊磨ノ成績ヲ擧ゲヤウトシタ、其後結核菌發見以來、世界ノ結核専門學者ハ擧ゲテ結核豫防及ビ治療ノ特殊療法ヲ結核菌製劑ニ依リ達成セントスルニ努力シ、體質論等ハ一般トシテハ殆ド顧ミラレナカツタ時代モアツタガ、夫等ノ研究ガ何レモ皆其ノ目的ヲ達セザリシヲ以テ、世ハ復タ再ビ體質論ニ耳ヲ藉サントシテ居タ、當時外科的療法ハ既ニフ、ルラ

ニ先生ノ人工氣胸ナドガ始メラレテハ居タガ、吾々ハ未ダソレヲ知ラナカツタ、其ノ20餘年前ノ昔、自分ハ初メテ肺結核豫防方法トシテ有效ナルベキ實行問題ヲト考ヘ、ヤハリブレイメル先生ノ原則トシタル體質論ガ根據ノ確カニコトヲ認メ、ソレヨリ推シテ呼吸體操ヲ選ンダ、ソコデ外國ニ於ケル諸家ノ呼吸體操方式ヲ參酌シ、皮膚鍛鍊、「マッサージ」等ヲ應用シタルミユルレル式體操ヲモ加ヘテ一定ノ式ヲ考案シタ、呼吸體操ノ原理ニ於テハ深呼吸ト兼ネテ肢體、軀幹ノ運動ヲナシ、依ツテ以テ心臟虛弱ナ者ノ鍊磨ヲナサントスルガ第一ノ目的デアル點ヲ狙ツタモノデ、生理的療法ト呼ンダコトモアル(其ノ理論ハ實驗醫法大正7年7月號ヨリ10月號マテ「呼吸體操ノ生理」トシテ掲載、又其ノ成績ノ一端ハ吳秀三教授在職25年記念文集ニ掲ゲタル「跡見女學校ニ於ケル呼吸體操實施成績ニ就キテ」ニ略述)。今呼吸體操ノ原理、適應症、實行方法等ノ大要ヲ簡單ニ表デ示セバ左ノ通りデアル。

第16表 呼吸體操ノ主要目的

1. 心臟ノ鍊磨(強度運動ノ準備運動)
2. 肺活量増大
3. 呼吸(發聲基本)練習
4. 鼻呼吸練習
5. 筋神經各個鍊磨
6. 皮膚鍛鍊
7. 胸廓ノ矯正
8. 姿勢ノ矯正
9. 均整身體美ノ養成
10. 精神神經訓練

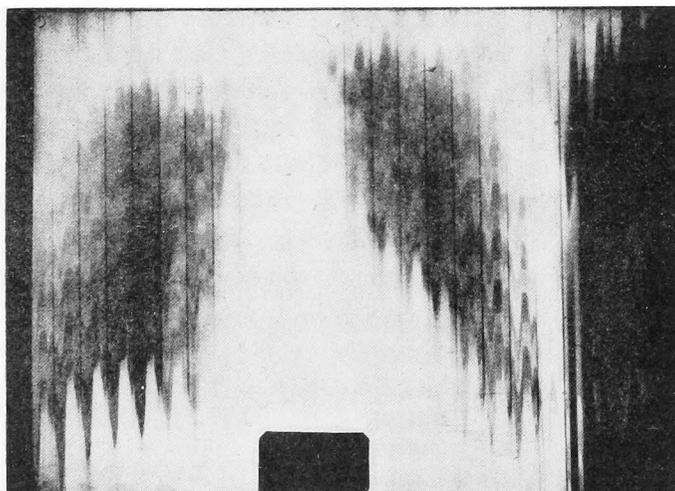
第17表 呼吸體操適應者ノ例

1. 運動ニテ動悸息切レノ起リ易キ者
2. 聲量ノ足ラザル者
3. 口呼吸ノ癖アル者
4. 胸廓ノ形狀及呼吸運動ニ不完全ナル所アル者
5. 其他部分的ニ筋神經ノ薄弱ナル所アル者
6. 感冒ニ罹リ易キ者
7. 神經症狀ノ或ルモノ
8. 胃腸症狀ノ或ルモノ
9. 新陳代謝疾患ノ或ルモノ
10. 老人性變調防止法トシテ

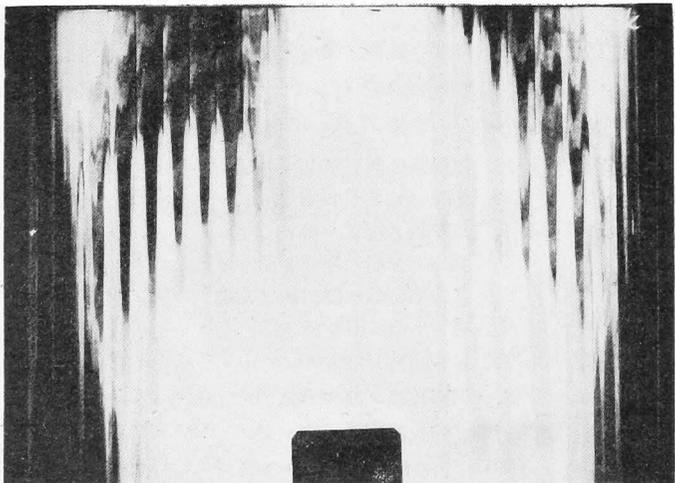
第18表 呼吸體操ノ仕方

1	用意	正安臥	按撫	全身筋緊張	
2	呼吸筋訓練	上胸部擴大	下胸部擴大	横隔膜 腹筋練習	
3	呼吸式練習	上胸部呼吸	下胸腹式呼吸	合式呼吸	
4	深吸氣姿勢	大姿勢吸氣	小姿勢呼吸		
5	筋緊張	腹背筋緊張	側筋緊張	腹筋緊張	背筋緊張
6	頸部運動	左右回旋	前後屈	左右屈	廻轉運動
7	胸部運動	後屈呼吸	前屈呼吸	側屈呼吸	捻屈呼吸
8	軀幹運動	回旋運動	屈旋運動	車輪形運動	
9	肢體運動	自制運動 (強力運動)	跳躍運動	平均運動	筋弛緩 (巧緻練習)
10	皮膚鍛鍊	手指摩擦	叩打	冷水摩擦	乾布摩擦

第6圖 上胸部擴大



第7圖 下胸腹式呼吸



平呼吸體操

用意 正安臥

皮膚鍛鍊

摩 擦 叩 打 } 人手又ハ自分
冷水摩擦 乾布摩擦
空氣浴 (日光浴)

肢體運動

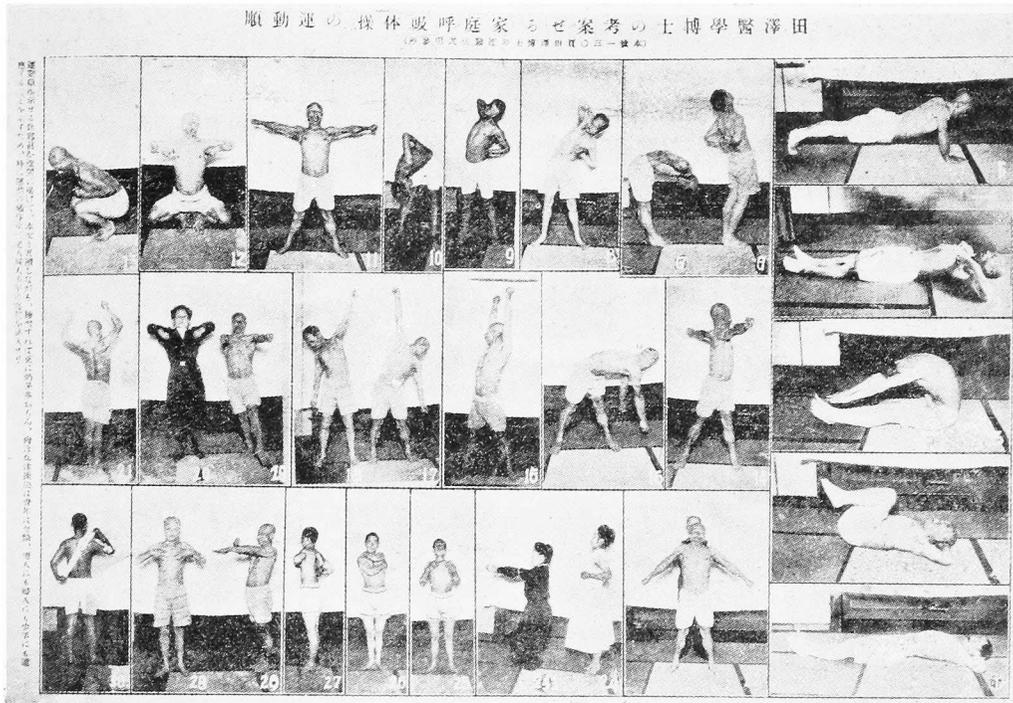
趾運動 足運動 }
指運動 手運動 } 臥位又ハ椅坐
下腿運動 大腿運動 }
前膊運動
下肢及上肢ノ末梢筋
緊張

歩 行

此ノ動態寫眞ハ私ガ呼吸體操ノ一部ヲ實演シ、ソレヲ矢部升氏ガ撮ツタモノデアル。上胸部擴大ト云フハ吸氣ヲシナイデ、上胸部ダケヲ擴大シタモノテ下胸腹式呼吸ハ吸氣ト共ニ下胸肋骨部擴大ト横隔膜下壓トヲ行ヒ、呼氣ト共ニソレヲ縮小シタモノテ、共ニ呼吸筋ヲ隨意的ニ動かス練習デアル。

普通ノ呼吸型ヲ動態「レントゲン」寫眞テ見ルト、横隔膜ガ上昇スル時ニ、肋骨ガ下降スルガ、此ノ呼吸運動テハ大體ニ横隔膜ガ上昇スル時ニ、肋骨モ上昇シ、所謂 *paradoxe Bewegung* ノ型ヲナシテ居ル、之レハ部分的呼吸筋ノ特別ナ練習ノ爲ニ、特ニサウイフ運動ヲナシタカラデアル。

第 8 圖 20 餘年前ノ呼吸體操ノ寫眞



此ノ寫眞ハ大正 7 年ノ頃「實業ノ日本」ニ掲載セラレタモノデアル、其後 10 餘年ヲ經タル時、勞資協調會ノ某君ガ地方視察ノ際、上州富岡ノ製絲工場ニテ講習會後最モ有效トシテ引續キ實行シ居ルヲ聞イテ歸ヘラレ、私ヲ訪フテ説明ヲ求メラレタ故、嘗テ「實業ノ日本」ニ掲ゲタル事ヲ告ゲタ、其後同君ハ懇々同社ヲ尋ネテ之ヲ見出シ、寫眞及ビ本文ヲ寫シテ配布サレ、其一部ヲ私ニモ送ラレタモノデアル。實演者ハ私ト、跡見女學校體操教師戸谷富太郎氏ト東洋高等女學校體操教師伊澤エイ女史ト學生 1 人デアル。

大正 7 年頃ヨリ數年間體操家等ノ間ニ講習會ニ依ツテ之レノ普及ニ力メタガ、常ニ肺結核ノ患者ニハ禁忌タルコトヲ説イテ居タ、然ルニ當時折々偶然ニ、全ク健康ニ見エル人々ノ間ニ著明ナル肺結核病竈ヲ有スル者アルヲ見タノデ、十分ナル健康診斷ヲ行ハズシテ之レヲ勵行スル事ノ危険ヲ感じ、健康診斷ノ普及ヲ以テ先決問題トナシ、呼吸體操ノ普及運動ハ自然ニ一時中止スルニ至ツタ、同時ニ又病者ニ對シ(左表平呼吸體操)ヲ試ミ慎重ヲ要スルコトヲ知ツタ、呼吸體操ニ就テハ近頃復タ再ビ應用法等ヲ検討中デ、何レ取纏メ發表シ得ルモノト考ヘテ居ル。當時又公立療養所ノ入所患者ニ重症者多ク、死亡率高キコトガ問題トナリ、結核早期診斷ノ普及及ヒ恢復期患者ノ始末ノ急務タルコトガ感ゼ

ラレタ、デ、全國公立療養所長會議デハ、大正 11 年ノ第 1 回會議以來毎年必ズ健康相談所開設ノ要望ガ上議セラレ、又政府ヘ建議モセラレタガ(「結核」第 18 卷第 1 號所載)、容易ニ實現ニ到ラナカツタ、尙大正 14 年ニハ小石川區大塚ニ東京市衛生課ノ健康相談所ガ全ク無豫算ノ間カラ、假建築ヲ以テ開始サレ、東京市療養所員ノ勞務提供ニ依ツテ實施サレタガ、受診者ハ大抵皆病人デ、健康者ノ診察ヲ望ム者ハ種々ノ努力ニモ拘ハラズ殆ドナカツタ、ソレデ初メテ此ノ大衆啓蒙事業ハ意外ナ大難事業タトイフコトガ感ゼラレタ。

健康診斷實行中、學生、看護婦等ノ中ニ微熱所有者ノ非常ニ多數ナルヲ見テ((1)(B)參照)、初メハ之レヲ活動性結核症蔓延ノ象徴ト考ヘタ

故、健康診断普及ノ極メテ急務ナルコトヲ痛感シ、ソレノ成否如何コソ實ニ我邦ノ結核豫防事業成否ノ分岐點トマデ感ジタ、ソレデ「豫防醫學實地」ノ開拓トシテ先輩、有力者、親族等ノ間ヘ説明ニ努メタ所、其結果遂ニ昭和3年ニ成器寮健康相談部、成器寮「プレントリウム」(大人「プレントリウム」、攝養室(2)(B)参照)、及ビ健康診査普及會(後ニ診療所取締規則施行ニ當リ、其筋ノ命ニ依テ成器寮ヨリ分離シ、日本延命協會ト改稱ス)ノ3者ヲ綜合シタル成器寮醫館ガ成立シタ、健康診断ノ診査方法、處理方法及ビ普及方法ノ研究並ニ唱道ノ手段トシテ、當時ハ斯カル實行機關創設以外ニ全く有意義ナ道ガ考ヘラレナカッタカラデアル。

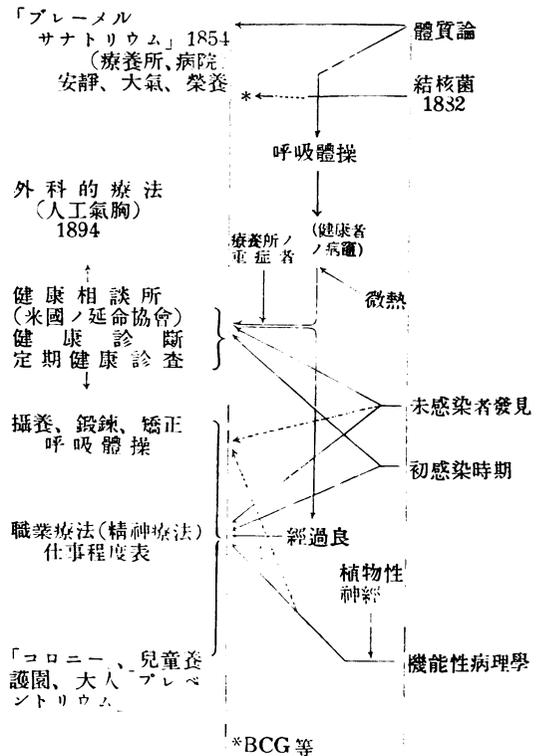
成器寮創立當時標語ノヤウニ唱道セラレタ語ノ一ツハ、「病人デナケレバ醫者ニ用ハナイト思フハ誤リダ、病氣ニナラヌ爲メニ折々醫師ニ診テ貰フコトガ醫業ニ對スル一般社會ノ通念ニナラネバナラナイ」トイフコトデアツタ、又校醫、工場醫等ノ如ク家庭醫トシテ其家ニ病人ノ出來ナイヤウニ診テ行クコトガ醫業ノ一部ニナラネバナラナイトノ主張デ、誕生日健康診査、家族的健康診査、團體的健康診査等ノ語ガ用ヒラレタ、ソシテ講演ニ、座談會ニ、印刷物ニト各種ノ機會ガ利用サレ、常ニ「10年モタツタラバ、昔ハ病人デナケレバ醫者ニ用ハナイモノト思ツテ居タ時代モアツタトイフ語リ草ニナルヤウニ」ト述ベタノデアツタ。

定期健康診査トイフ語ヲ用ヒタノハ、昭和4年春ノ朝日新聞社講堂ニ於ケル通俗醫學講座講演(同書第3輯所載)ノ演題「結核ノ豫防的治療ト定期健康診査」カラデアツテ、昭和3年ノ「學校衛生」[(2)(C)項参照]迄ハ繼續的健康診査トイフ語ヲ用ヒテアル、其後定期健康診査トイフ語ヲ用ヒタノハ、米國ノ Life Extension Institute ノ periodical health examination ノ語ヲ恰度適當トシテ選ンダノデアル。

斯クシテ成器寮デ健康診断ヲ實行シテ居ル中一、患者ニ對スル治療方針モ漸次新シキ見解

ヲ得タ、患者ニ對シテハ初メハ安靜ヲ嚴守サセルコトニノミ傾キ易クアツタガ、其後次第ニ經驗ヲ積ミテ勇氣ヲ得、少シヅツ運動、仕事ヲ加味スルコトガ出來ルヤウナツタ所ヘ、健康診査ニ依ツテ發見サレタ患者ハ意外ニ經過ガ良好デ仕事ニ堪エルコトヲ見テ、漸次作業療法又ハ職業療法ノ經驗ヲ積ミ、精神療法ノ一ツトシテ有效ナル實績ヲ認メタ、ソレデ結核豫防ノ大眼目トシテ當然ノ事ナガラ死亡率ノ減少ト職業ノ持續トヲ併ハセ考ヘルベキコトノ必要ヲ改メテ認識シ、昨年ノ本會ニ於ケル死亡統計作成ニ關スル報告ヲ以テ筋道ダケハ一段落トシタノデアル、以上述ベタ經過チ一ツツ表ニ纏メテ見タモノガ次表デアル。

第19表 由來、經過、現在ノ期望



此表ノ大要ハ已ニ上ニ段々ト略述シテ來タノデアルガ、尙1,2ノ説明ヲ補足シテ置カウ、吾々が健康診査ノ唱道ニ努メテ居ル間ニ諸君ニ依ツテ未感染者及ビ初感染者ノ疫學的意義ガ闡明セ

ラレ、健康診斷ニ於ケル最も重要ナ着眼點ノ一ツトナツテ來タ、從ツテ又ソレガ攝養鍛鍊、職業療法、大人「プレベントリウム」等ニ對スル關係ハ極メテ密接トナルニ至ツタ、殊ニ未感染者ノ虛弱者ナドハ呼吸體操ノ如キハ最も適スルデアラウシ、初感染者、發病者ナドニハ職業療法ノ如キハ特ニ注目ニ値スルデアラウ。是等ノ問題ト共ニ植物性神經系機能乃至機能性病理學ノ問題モ新シキ研究目標トナラネバナラナイ、是等ノ研究過程ヲ上表ニ纏メタ積リデアル。

終ニ臨ミ斯カル方面ノ研究ニ依ツテ將來ノ我邦ノ結核豫防事業ノ實績上ニ有力ニ寄與シタキ希望ヲ以テ次ノ結語ヲ掲ゲテオク。

結語 我邦ノ結核豫防事業ノ目標ハ、外國トノ統計ノ比較又ハ米國「フレミングム」ノ成績等ヨリ見テ、第 1 ニ其ノ死亡率ヲ現在ノ 5 分ノ 1 以下ニ減ズルコトデアルベキデ、ソレハ理論的ニハ現在既ニ知ラレ居ル事項ノ應用ニ依ツテ、完全ニヤレバ數年間ニデモ大體出來ル筈ノ仕事デアル、此ノ意見ハ大正 12 年ノ本總會ニ於テ述べタ所デアルガ、實際ノ年限ハドレ丈ケ完全ニ近クヤレルカニ依ツテ極マル譯デアル、而シテ其完全トイフハ要スルニ、健康診斷ト診斷結果ノ處理問題ノ普及ヲ根本トシテ居ルデアル。然ルニ健康診斷結果ノ處理ハ、多クノ時間ヲ要

スル仕事デアルカラ、全國一般ノ實地醫家ノ總動員ノ協力ヲ得ルデアラザレバ到底徹底ヲ期セラレナイ、ソレニハ健康相談所漸次増加シ、靑少壯年ノ體力國家管理モ將ニ行ハレントスル今日、一般ニ應用シ易キ簡便ナル處理方法ノ有效適切ナルモノノ急速ナル發達ガ最も必要デアル、之等ノ考ヘヨリ研究ノ中途ニテ不備ノ點多トモ、敢テ一應ノ取纏メヲナシ、同攻諸君ノ斧正ヲ仰グコトトシタ次第デアル。

而シテ其ノ實行方法ノ中心點ハト云ヘバ、定期健康診査ノ復期間表ト仕事程度表トヲ適切ニ組合ハセテナルベク社會ノ實情ニモ適合サセ、ソレニ攝養、鍛鍊、矯正ノ方法、適當ナル收容施設ノ利用等肺結核一般療法ノ原理ニ準ジタル事項ヲ適當ニ配伍シ行クコトニナルベキデアル。併シ之等ノ具體案ハ多少ハ人ニ依ツテモ相違スルデアラウガ、兎ニ角一層斬新的確ナル治療法又ハ豫防法ノ完成スル迄ハ斯ウイフ方面ノ醫學及ビ實地ヲ世界ニ對スル我邦ノ特色トイフ程ニ勃興普及サセ行ク方針ガ、結核豫防ノ資源甚ダ貧弱ナル我邦ニ於テ、速急ニ死亡率減少ノ實績ヲ擧ゲル爲メニ最も有力デアルト考ヘル。而シテ之レハ又一般ノ體位向上ノ問題トシテモ當然大ニ發達セネバナラナイ領域デアル。

文獻：一上文中及ビ歐文抄録ノ終ニ掲ゲテアルガ、其他ハ今後ノ個々ノ問題報告ノ際ニ譲ル。

(上文ノ抄録ハ今年 4 月 2 日總會席上印刷物トシテ配布シテアル)

附記：一本文中ニ掲ゲタル集團檢診其他ノ詳報ハ近々「結核」ニ掲載ノ豫定デアル。

附表：一肺結核患者ノ豫後等ニ關スル統計的觀察(昭和 5 年ノ本總會演說)ニ於テ掲ゲタル表

1. 宗教ト豫後(東京市療養所最初 10 年間ノ統計)

	佛 教			神 教			「キリスト」教			無 宗 教		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
治癒輕快率	19.2	13.9	17.5	36.4	15.7	29.2	34.9	23.4	30.6	19.8	11.7	17.4
死亡率	59.9	70.6	63.5	57.9	60.5	58.8	44.2	45.9	44.9	73.4	82.6	76.1

2. 教育ト豫後(東京市療養所最初10年間ノ統計)

		實 數		率	
		治 癒 輕 快	死 亡	治 癒 輕 快	死 亡
尋常小學	男	888	2956	19.6	65.4
	女	457	1948	16.6	71.3
	計	1245	4904	17.2	67.6
高等小學	男	266	803	19.3	58.1
	女	56	335	10.6	64.4
	計	322	1138	16.9	59.9
中 學	男	225	599	19.7	52.5
	女	43	152	16.0	56.7
	計	268	751	18.9	53.3
高等學校 專門學校	男	35	40	29.7	33.9
	女	1	1	12.5	12.5
	計	36	41	28.6	32.5
大 學	男	32	46	26.9	40.0
	女	1	0	100.0	0
	計	33	46	28.4	38.8
其 他	男	68	258	13.8	52.5
	女	51	202	17.2	69.6
	計	119	460	15.2	58.3

此ノ數字ニ對シテハ年齡、地位等ノ關係モ顧ミテ批判セネバナラナイコトハ勿論デア
アルガ、大體ニ於テ教育程度ノ高イモノガ低イ者ヨリ成績ガ良クナツテ居ル。

3. 月別死亡率(東京市療養所)(率ハ對月別在所者數)

年 月	大正 10年	11年	12年	13年	14年	昭和 元年	2年	計	平均
1月	11.5	10.5	9.0	9.1	10.0	(7.5)	(6.1)	(63.7)	(9.1)
2月	(10.3)	(8.8)	8.6	(8.3)	(7.4)	(7.4)	6.6	(57.4)	(8.2)
3月	11.2	10.7	(8.0)	(7.8)	(8.4)	9.4	8.6	64.1	(9.1)
4月	11.1	10.3	(7.6)	8.8	(8.4)	9.0	9.0	64.2	(9.1)
5月	12.8	13.1	10.3	9.3	8.9	8.4	8.0	70.8	10.1
6月	11.0	10.9	9.1	9.5	9.0	8.6	8.1	66.2	9.4
7月	13.8	12.9	11.0	11.6	9.7	10.2	8.2	77.4	11.0
8月	13.6	12.4	8.5	10.1	10.9	8.3	9.0	72.8	10.4
9月	11.5	11.8	9.2	9.6	9.4	8.3	(6.0)	65.8	9.4
10月	15.7	9.9	14.9	9.3	11.5	9.7	6.9	77.9	11.1
11月	(9.2)	(7.1)	13.6	9.3	9.1	9.0	(6.3)	(63.6)	(9.1)
12月	(10.6)	(9.3)	11.8	9.0	11.4	(7.0)	7.1	66.4	9.5

ゴシック文字ハ各年ノ最高率、()ヲ附シタルハ各年ノ最低率ニ當ル。